脱兎のごとく

MandG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
脱兎のごとく

【Ｎコード】
Ｎ３５１８Ｒ

【作者名】
ＭａｎｄＧ

【あらすじ】
危機察知能力を持つ少年、逢沢駆。
逃げてばかりのへたれだけど困った人はほっておけない。
そんな駆が異世界で織りなす物語。

プロローグ

とある学校の前の道では、少年と不良たちの鬼ごっこが行われていた。
この鬼ごっこは追いかけられている少年、逢沢駆が絡まれている人を助けたことに始まる。当時駆は学生服を着ていたために学校を特定されてしまったのだ。
その時以来一カ月の間、校門の前に恐いお兄さんが待ち構えているという状況に陥っている。
大事にしてしまうとあとが恐いので警察には通報しないでおこうと決めたのだが、それをいいことに不良たちの行動はエスカレートするばかりであった。

「いい加減にしてくれよ」

うんざりした様子でつぶやく駆。一か月も大人数の男に追いかけまわされれば愚痴もこぼしたくなるだろう。
駆を追いかける人数は今となっては２０人である。
というのも、駆がいつまでたっても捕まらないことに業を煮やした不良が仲間を呼んだのだ。しかし、結果は変わらず未だに駆を捕まえられずにいた。

この一ヶ月間、逃げ切れたのは駆が持つ特異な能力のおかげに他ならない。
その能力とは危機察知能力である。

昔事故にあったときに現れた能力で、自身に危険が迫ると髪が逆立つような感覚に陥る。
この能力のおかげで待ち伏せや挟み撃ちなどを掻い潜ってきたのだ。

「おいっ、そっちに行ったぞ！」

その言葉と同時に駆は髪が逆立つような感覚を感じた。

「待ち伏せかな……っと」

物陰から飛び出してきた不良の手を走るスピードを落とさないように避け、手をつかんで柔術の要領で男をなぎ倒す。建物の間の狭い道だったため、男は壁に顔面を打ちつける。男が顔を手で覆っている間にビルの脇に備え付けられた階段を駆け上がる。

「上に行ったぞ！」
「よし、やっと追いつめたぞ」

追いつめたと思い笑みを浮かべる不良たち。しかし、不良たちが屋上にたどりつく頃には駆の姿はなかった。

「ふーっ、なんとか今日も撒けたな」

不良たちのいる隣のビルの屋上で息を整える駆。
二つのビルの落差は2メートル程で飛び移るのはそんなに難しい事ではなかった。

「いつまで続くんだろ」

うんざりした様子でため息をつく駆。そもそも一度彼らの邪魔をしただけでこんなに追われる理由がわからなかった。
とりあえず不良に見つからないように息を潜めていた駆だったが、突然駆のカバンから大きな音が鳴り始めた。

「やばっ、携帯切んの忘れてた。」

慌てふためく駆。その足元には幾何学的な模様が輝いていた。

「なん……」

だこれ、とつづける間もなく駆は強い光とともに消えた。

プロローグ（後書き）

処女作です．でも楽しんでいただければ幸いです。誤字脱字、ご指摘ご感想は非常にためになります。お書きくださると嬉しい限りです。

突然ですが『脱兎のごとく』を改訂しようと考えています。

隴を得て蜀を望むという言葉があるように欲望というものは尽きないものであります。悲しいことにこれは人間の真理なのでしょう。

さて、僕が言いたいことは決して人間の本質についてなどではありません。要するに僕が言いたいことは、ただ小説を書くだけでは物足りない、”もっといろんな人にこの小説を見てほしい！”ということです。

閲覧履歴とかを見ていると分かるんですけど、最初のほうで皆さん飽きちゃっているんですよ。見直してみると確かに登場人物みんなキャラ薄いし、物語のテンポ遅くてだれちゃうんですよね。

そこで今ある、『脱兎のごとく』を『脱兎のごとく（改訂前）』と称し、新たに『脱兎のごとく』を書いていきたいと考えています。新たにといっても、主人公やヒロインのキャラはこのままでいきたいと考えています。物語も大きく変更することなく、無駄な描写を省くなどしてテンポを上げるだけにしたいと思っています。

今は改訂に割く時間がないので随分と先のことになります。おそらくは来年の春頃になるでしょう。

これは只の自己満足であり、改訂したからといって閲覧数が伸びることはないかもしれないし、これで良いと思って書いた小説をどこまで変化させれるかと言えば、もしかすると殆ど変更することなく終わってしまうかもしれない。ですが、どうしても可能性を捨てることができません。

どうぞよろしくお願いします。

アーカーディア

見渡す限り、木。四方八方、木。気絶から覚めた駆の目に飛び込んでくるのは、木だけであった。
突然の風景の変化に駆は混乱しそうになるも冷静なろうと努める。

「どこ、ここ？　なんでこんな所に倒れてたんだ、俺。さっきまで路地裏にいたはずだよな……。不良達を撒いて、そのあと地面がが光り始めてぁぁぁぁぁ！！」

自分の考えを振り払うかのように叫びだす駆。
駆はファンタジー小説が好きで、主人公が異世界に行くなんていうものも何度も読んだ。そんな駆は気づいてしまったのだ、今の自分がそんな小説に出てきた主人公たちと似た状況にいることを。
いやいやそんなわけない、そんなこと認めないぞ、と言わんばかりに頭をかきむしる。

「そうだ携帯！」

さっき不良に見つかりそうになったことは忘れてカバンの中から携帯を取り出すが、

「うっ、圏外……」

圏外の携帯ではどうしようもないのでカバンにしまい、あたりを見渡す。
どんなに目を凝らしてみてもここは森以外の何でもなかった。
このままここにいては危険だと感じた駆はとりあえず森を抜けることにした。

森から出ようと決心して5分足らず。
危険を感じた駆がその場から飛び退くと、さっきまで駆がいた所を平均の3倍はあるのではないか、という大きなイノシシが走り抜けていった。

「えっ、えええーーー！！」

驚きの声を上げつつも駆はイノシシとは逆方向に一目散に逃げようとする。
イノシシは完全に駆に狙いを定めているようだった。どんなにイノシシから離れようとしてもすぐに追いつかれてしまう。

「ここ最近追いかけられてばかりだな」

と、最近癖になってきたため息をつく。
木もなぎ倒すようなイノシシの突進だ。もし自分に当たったら、と想像すると駆は背筋が寒くなるのを感じた。
ぶほーーーー、という雄たけびとともに駆に突進してくるイノシシの額に矢が突き刺ささった。ドスンという音とともにイノシシが倒れる。

「大丈夫か」

駆の背後から茶髪の少年が姿を現した。
弓を持って佇む姿はかなり様になっている。

「あ、ありがとう」
「いいよ、いいよ。元々狩りに来てたんだし。それにしてもこんな所で武器も持たずにどうしたんだ？」
「いやー、ちょっと道に迷っちゃって」
「どう迷ったら森の中に迷いこむんだ？まあ、まず森から出ようか」

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺はレオン。アーカーディアで宿屋をやってるんだ。ま、両親が経営してんだけどな」
「俺は駆だ。本当に助かったよ」
「狩りのついでだからな。気にすんな」
「それにしても力あるんだな」

イノシシを引きずってるレオンをみて苦笑気味に言う。レオンは１００キロ以上はあるであろうイノシシを苦もなく引きずっている。

「ああ、俺は軽くだけど身体強化できるんだよ」
「身体強化？」
「無系統魔法のひとつだよ」
「魔法ね……」

本格的にファンタジーの世界に紛れ込んだことを認めざるを得ないようだ。

「魔法が使えるからって気にしないでくれよ。別に自分が優れていることを誇示するつもりはないから」

「あ、うん」

レオンの言い方を考えるとこの世界では魔法を使える者は少ないのだろうか。そんな疑問を抱えつつも曖昧な返事をする駆であった。

２０分も歩くと人の手で造られたであろう塀が見えてきた。おそらく野生生物対策なのであろう。

「ここがアーカーディアだよ」

地球で言うと中世くらいであろうか。レンガ造りの家が並んでいる。

レオンは門を入ってすぐの所にある他の家よりも二回りほど大きな家の前で立ち止まった。

「ここが俺の家だよ」

「他の家よりもかなり大きいな」

「まあ、宿も兼ねてるからな。立ち話もなんだしカケルは先に中に入っておいてくれ。俺はこいつを置いてくるからさ」

レオンは引きずってきたイノシシを顎で指しながら言うと、家の裏へ向かった。

「失礼します」
家の中で駆を出迎えたのは茶髪の女性だった。おそらくレオンの母親なのだろう。
「いらっしゃい。泊まりかい？」
「いえ、レオンにここで待っておくように言われたので……」
「ああ、レオンの友達ね。見慣れない顔だけど村の外から来たのかい？」
「ええ、まあ」
異世界から来たとは言えないので、駆は曖昧に返事した。
そのとき扉が開き、レオンが入ってきた。
「待たせたね。そこに座ってくれ」
レオンは駆の前の席に座ると質問を始めた。
「さて、あんな所にいた理由を聞きたいんだけど」
駆は本当のことを言ってもいいのだろうか思案した。
異世界からきましたなんて冗談にしか聞こえないし、頭がおかしいと思われてしまうのではないか。
難しい顔で考え込む駆にレオンは笑顔で話す。
「別にあそこにいることが悪いというわけじゃないさ。ただ困っているなら力になるよ」
助けは必要なので異世界のことは伏せて話すことにした。

「気づいたらあそこにいたとしか。お金ももってないし、帰る道もわからない。どうすればいいのやら……」
「気づいたら森の中に？　まあでも森の中は危険だからね。魔法使いでもないと丸腰で入る人はいないだろうね」

レオンは少し考え込んだ様子だったが、すぐに駆に向き直ると「とりあえず俺の家に泊まりなよ」と軽い感じで言った。
家に、というよりも泊まるのは宿になるのだろう。宿に泊まるにはお金が必要だろうと考えた駆は二度目になるが言った。

「お金は持っていないんだけど」
「それはさっき聞いたよ。もちろんただで泊めるわけにはいかないだろうけど、家の手伝いをするなら父さんも母さんも文句はないと思うよ。今は客はいないし、宿っていっても副業みたいなものだからね」

本来、家の手伝い程度で払えるような金額ではないのだろうが、断れば今日は野宿ということになる。流石にそれは遠慮したい駆は申し訳なさを感じつつもレオンの家に泊めてもらうことにした。

レシィ

駆は宿の一室を使わさせてもらえることになった。
レオンの両親はレオンの話を聞くと、すぐに宿に泊まることを了承してくれた。元々宿は副業のようなものらしく、あまり気にしなくていいとのことだった。

借りた部屋に入った駆はやっと現状について考えることができた。
今までは混乱していたため、あまり深く考えることができなかったのだ。

「はあ、魔法か……」

レオンから出た魔法という言葉は、今いる世界が異世界であることの裏付けとなった。
レオンが嘘を言っている可能性も無きにしもあらずだが、駆が見る限りレオンが嘘を言っている様には見えなかった。

「どうすれば帰れるのかな。強くなっているわけじゃないようだけど」

駆が読んできた小説では異世界に来た主人公にはチートな能力が備わったりしたのだが、今のところそんな様子はない。何の手掛かりもないため今から何をすればいいかもわからない。

「やっぱり王様あたりに会いに行くべきだよな」

フラグが立たないなら自分で立てればいいじゃないか、という考

えのもと一応の目標を立てたものの、今の駆には王様に会う方法などない。

「まずは情報を集めないとな」

当面は情報集めをすることにしたところでレオンに呼ばれた。

「カケル。夕飯が出来たよ」

「ああ、すぐ行く」

まだまだ考えなければならないことはあるが、空腹な駆は考えを打ち切った。

駆はこれからの苦労を思い、深くため息をつきながら食卓へと向かった。

駆がレオンの家に住むようになってからもう5日が過ぎた。

手伝いはまだ慣れたというわけではないが、邪魔にならない程度には働けるようになってきた。

レオンの家は宿であるが客はこの5日間一人も来なかった。というのも交通機関の発達していないこの世界では、アーカーディアのように王都から離れた村に来る人はあまりいないのだ。

そういうわけで駆はもっぱら農牧業の手伝いをしていた。

「カケル。今日はもう終わりにしようか」

「ああ、もう日も暮れてきたしな」

そろそろ終わりにしよう、そんな会話をしている二人に宿で駆を出迎えてくれた女性、レオンの母親であるリアンが声をかけた。

「仕事終わりで悪いけど川に水を汲みに行ってくれないかい」

中世レベルの文化のアーカーディアには水道などというものはなく、川や井戸を利用している。

川は村に近い所に流れているが、夜になれば夜行性の凶暴な魔物が水を求めて川にやってくるので日の暮れないうちに水を確保する必要があるのだ。

そして駆も驚かされたがこの世界には魔物が存在するのだ。

魔物は闇を好み、基本的には夜行性であるらしい。魔物には体から黒い煙のようなものが出ているという統一の特徴がある。

この世界ではこの特徴を基準に魔物と普通の生物とを区別している。

完全に日が暮れて魔物が活動し始めてしまう前に水を汲む必要のある駆とレオンは二つ返事で引き受けると、すぐさま木製の容器を手に取り川に向かった。

「ちょっと急がないとまずいね。森が騒がしくなってきたよ」

レオンの言うように、森からは獣の咆哮が聞こえ始めた。

これは急がねばとあわてて水を汲もうとする駆であったが、思わず作業を中断してしまう。駆が手を止めたことを訝しんだレオンが駆の目線の先を追うと、そこには人影があった。

その人影は駆達に近づくと澄んだ綺麗な声で尋ねた。

「宿はどこですか？」

レオンは声の主が女の子だったことに驚いた。

地球とは違いこの世界では旅をするのはかなり危険なのだ。

アーカーディアから一番近い村でも馬車で二日はかかる。魔物は昼にいないというわけでもないし、普通の動物でも危険なものもいる。

見たところ女の子は馬車に乗ってきたわけではないようだった。つまりここまで歩いてきたということだ。普通の大人でも命を落とすような道程を一人で歩いてきたということが、この少女がただ者ではないことをレオンに理解させた。

ただ、宿を貸すのに人を選ぶわけでもないので、レオンは女の子を宿に案内することにした。

女の子の名前はレシィというらしい。

レシィはあまり喋らない。

駆とレオンとレシィの三人で宿に向かう間、レオンと駆はレシィに色々と話しかけていたが返ってくるのは簡素な言葉ばかりだった。話の続かない微妙な空気が漂い、駆とレオンは宿までの道のりが長くなった様に感じていた。

宿にたどりついた後、レオンはまたレシィに驚かされることになった。

レオンを驚かせたのはレシィの髪の色だった。

レシィは銀色の髪で赤い眼をしていて、地球でいう中学生くらいの女の子だ。ファンタジーの世界だしと思って駆は気にしなかった

が、この世界では銀髪というのは一般的ではないのだ。少なくともレオンは銀髪の人がいると聞いた例(ためし)がなかった。

この世界に住むレオンですら珍しいと思う少女、レシィ。
この少女がきっかけで駆の長い長い旅が始まるとは、駆には知る由もなかった。

ユーリ教

「食卓が一気に賑やかになったわね」

レシィはもちろん、駆も食事中はあまり喋らないので実際に賑やかになったわけではない。

宿には食堂などはなく、リビングにある大きな食卓でレオンの家族と客が一緒に食べることになっている。また、レオンの宿には名前がない。あまり利用されることもないので名前が必要なかったのだ。

今食卓にいるのは駆とレオン、レオンの両親、レシィの五人である。

「リオンさんどうしたんだ？　えらく機嫌がいいみたいだけど」

「前に客が来たのは一年以上前だからな。母さんは人と話すのが好きだから、新しく話せる人ができて機嫌がいいんじゃないか」

「大阪のおばちゃんみたいだな」

「オオサカ？」

「俺の国の地名の一つだよ」

「そういえばカケルの住んでいた所については聞いたことがなかったな。顔のつくりが違うし、外国から来たんだなとは思ってたんだけど、やっぱりそうだったか。よければカケルの国のことを教えてくれないか？」

駆は自分の失敗を悟った。

異世界に対するこの世界での認識がどんなものかわからないため、今まで自分の素姓についての話題は避けてきたのだ。
レオンたちは駆を助けてくれた恩人であるが、今まで異世界から来た事は話さなかった。簡単に話してよい事だとは思えなかったからだ。
駆は何日もレオンたちと過ごしてきて、レオンたちの人柄を十分に知ることができた。レオン一家には話してもいい、むしろ話すべきだと思う駆であったが、レシィは会って間もないので話しても大丈夫なのか駆には判断がつかなかった。
レシィのいるこの場で異世界から来たという話をすべきではないだろう、と結論付けた駆は異世界から来た事は避けて、日本についてのみ話すことにした。

「俺の国は日本っていう島国なんだ」
「ニホン？　聞いたことないな。それにシマグニっていうのも聞いたことないな」
「島国ってのは海に囲まれた国のこと。日本は小さい国だから有名じゃないんだろうな」
「確かに地理に詳しいわけではないからな。アーカーディアは海から遠いし。そういえばどうやってここまで来たんだ？　ここから海までかなりの距離があるはずだよ」
アーカディアから一番近くの海まで馬車で２０日はかかる。レオンが疑問を持つのも当然だった。
駆は一度レオンから目をそらし、躊躇いがちに答えた。

「実は、今まで言わなかったけどここまで魔法で飛ばされたみたいなんだよ」
「魔法？」
「ああ。突然足元が光り始めたと思うとあの森にいたんだ」

駆は少し期待を込めて言う。
人を転移させることのできる魔法があると分かるだけで地球に帰る大きな手がかりだ。

「人を移動させる魔法があるんだね。俺は魔法に詳しくないから聞いたことなかったよ」

駆は内心がっかりしながらも、俺も聞いたことなかったよ、とだけ答えた。
レオンはそんな駆の様子を不思議に思いながらも質問を続けた。

「それでニホンっていうのがどんな所なのか教えてくれないか？」
「日本は科学っていうのが発達していて……」

駆は人に何かを教えることが好きな少年である。
そんな駆は説明しているうちに熱中してしまい、飛行機や車などについてもレオンに話してしまった。

「空を飛ぶことができるなんて……」
「馬よりも速い乗り物があるって本当かい？」

レオンだけでなく、いつの間にか駆の話を聞いていたリオン、レオンの父親も驚いたように呟いた。
ただ、レオンたちはずっとアーカーディアに住んでいたため、都会にはそんな便利なものがあるんだなという程度の認識しかなかった。
そんな中、レシィだけは駆が出会ってから崩したことのない無表情が崩れ、訝しげな表情をしていた。
駆はそんなレシィの様子には気付かず更に話を続けた。
「それと日本には俺が知る限りは魔法使いがいなかったよ」
駆の言葉はさっきの飛行機や車の話よりも何倍もこの場にいる人間に衝撃を与える言葉だった。
「魔法使いがいないって……誰が貴族になるんだ？」
レオンが驚きつつも駆に尋ねた。
「日本には貴族がいないんだ。ここでは魔法使いが貴族になるのか？」
駆の答えはこの世界では考えられないものだ。
レオンはあわてて駆に問いかけた。
「カケルはユーリ教の教えを知らないのか？」
「ユーリ教？」
レオンは驚いた様子だったが、すぐに納得がいったかのように頷き始めた。

「そっか。カケルは海の向こうから来たんだったよな。それじゃあ知らないのも無理はないのかな」

勝手に勘違いしてくれたのは助かったが、明らかに一般常識であろうことを知らないのはまずいと考えた駆はユーリ教について尋ねることにした。

「できればユーリ教について教えてほしいんだけど」

「ああ、ユーリ教はオーラウンド……駆の国では知られていないらしいからここ、イーロット大陸だけかな？　まあ、イーロット大陸のみんなが信仰している宗教なんだ」

駆はレオンがユーリ教を信仰しているのがみんなだと言いきったことに違和感を感じつつも、レオンの話を聞き続けた。

「昔、オーラウンドを救った女神がいたんだ。その女神の名前がユーリ。ユーリ教はそのユーリ様の考えに基づいて出来た宗教なんだ。ユーリ様がいうには魔法というのは神様から与えられる力なんだって。だから魔法が使えるということは、神様から与えられた人の上に立つための資格のようなものなんだ。さっき言った魔法使いしか貴族になれないという理由は、魔法が使えない者は人の上に立つ資格を神様から与えられていないと考えられているからなんだ」

レオンの話は短いながらも、駆にとってかなり重要な情報がたくさん含まれていた。

まず最初にこの世界がおそらくオーラウンドという名前であることだ。レオンがはっきりと言ったわけではないので、確実にそうだと言いきることはできないが話の流れを考えるに間違いではないはずだ。

二つ目は今いるアーカーディアがイーロット大陸に属しているこ

とである。
三つ目はユーリ教についてである。ただ、駆はユーリ教についての話にはいくつかの疑問があった。
駆の疑問はどのようにして女神の考えを聞いたのだろうかということや、『神様から与えられた魔法』が、いつの間にか『神様から与えられた人の上に立つ資格』にすり替わっていたこと、ユーリが何からオーラウンドを救ったのかということだ。
女神に会うというのはファンタジーの世界だからということで納得できるし、地球にも嘘か真(まこと)かは別として神様の声を聞いた人がいるくらいなのでスルーしてもよいことなのかもしれない。
考えるよりも聞くほうが早いなと気づいた駆は、早速レオンに聞くことにした。

「どうやってユーリ様の考えを聞いたんだ？」
「ユーリ教の創設者が聞いたらしいけど方法までは知らないな」
「じゃあ、魔法は神様から与えられたものっていうのはいいとして、どうしてその魔法を使えることが人の上に立つことに繋がるんだ？」
「そういえばそうだね。俺は魔法が使えるから人の上に立てると教えられてきたから気付かなかったよ」
「ユーリ様は何からオーラウンドを救ったんだ？」
「死の煙からだよ。死の煙は吸うと死んでしまうこともある危険な煙なんだ。死の煙は光の魔法を使えば消すことができるらしい。ユーリ様程の強力な光の魔法の使い手がいなければオーラウンドの生き物は絶滅していたかもしれないとも言われているんだ」
結局、三つの疑問の内分かったことは一つだけだった。
駆は分からなかったことはほっておいて、話し続けているレオンの話を聞くことにした。
「その時死の煙を操っていたのが闇の使い手たちだったらしいんだ。

だからユーリ教では闇の使い手は死刑ということになっているんだ」
「俺の世界には魔法使いがいなかったから知らないんだけど、闇の魔法は誰にでも使えるのか？」
「いや、魔法使いの使える属性は生まれる時には決まっているらしい。だから誰にでもは使えないはずだよ」

駆は思わず声を荒げてしまいそうになったが、レオンに対して怒りを感じているわけではないので努めて冷静を保ちながら尋ねた。

「……闇の魔法使い全員が死の煙を操っていたのか？」
「それは知らないけど、死の煙を操っていない闇の使い手も死の煙を操るようになる前に殺したって聞いたよ」
「っ、そんな、そんなの酷過ぎる。闇の使い手だってだけで殺すなんて。悪くない闇の使い手だっているかもしれないのに」

駆はあまりに理不尽な話に憤りを隠せていなかった。
そんな駆を諌めるかのように、今まで黙って話を聞いていたレオンの父親が語りかける。

「カケル。確かにこれは酷い話かもしれない。だが死の煙によってオーラウンドの生物の数は半分ほどになってしまったという話だ。死の煙を操ることのできるのは闇の使い手だけだともいう。多くの人が安全に暮らすためには必要なことなんだよ」

駆にはレオンの父親の言っていることは理解できるが認めたくなかった。
少し冷静になった駆は場の空気が悪くなっていることに気づいてとりあえず、レオンの父親の意見を認めたふりをすることにした。

「……そう、ですね」

「食事を再開しよう」

レオンの父親が食事再開の合図をする。

駆は気まずい雰囲気が続くのではと申し訳なく思ったが、リオンが普通に会話を始めた。

「じゃあ、私はレシィちゃんの故郷についても知りたいわ」

そこからは話をするのが好きなリオンが会話の主導権を握ることとなった。

駆はリオンに感謝しつつ、リオンたちの話に耳を傾けた。

飛行機

駆とレオンがレシィと出会った川の上流。その近くにある小さな村に多くの兵士がいた。

兵士たちは銀色の鎧に身に纏(まと)い、柄に十字架の刻まれた剣を腰に帯びている。鎧の左胸の辺りには光を彷彿とさせる紋様が彫られている。

村人は突然傾(なだ)れ込んできた兵士たちを野次馬根性丸出しで眺めている。

村人の一人が呟いた。

「神殿兵……」

兵士の鎧に彫られている光を模した紋様は間違いなく、ユーリ教に帰依(きえ)する者たちによって形成された神殿兵の証である。

神殿兵が組む隊列の一番前には、周りの若い兵士たちとは一線を画した雰囲気を醸し出す兵士がいた。

一番前にいる白髪交じりの四十代後半くらいに見える神殿兵が若い兵士たちの方を振り返り、指示する。

「何としても異端者の手掛かりを掴め。ここに来たのは間違いないんだ。何か分かったら必ず俺に報告しろ」

「はっ！」

若い兵士たちは粛(しゅく)として返事をすると自身の仕事を果たすべく駈(か)けて行った。

兵士たちは家を尋ね回り、一様に同じ質問をする。

”銀色の髪で赤い眼をした少女を知らないか？”

小さな村で、余り来る人がいないこの村では、村に来た人のことは村人全員が知っている。

銀髪に赤い眼などという珍しい容姿の女の子はすぐに思いついた。

「ああ、ダンのところに泊まってた子の事かい」

「その子がどこに向かったか知らないか？」

「知らんねぇ」

兵士は短く感謝の言葉を述べると報告に戻った。

「隊長」

「何か分かったのか？」

「行き先は分かりませんが、やはりこの村にいたようです。話によると、ダンという者のもとに泊まっていたとのことです」

続々と戻ってくる兵士たちだが報告する内容はほとんど同じで、ダンのところに泊まっていたという情報ばかりだった。

兵士が全員戻ってきたところで、隊長と呼ばれた男が指示を出す。

「お前たちはここで待機だ。俺はダンという者に話を聞いてくる」

「はっ！」

ダンの家に辿り着いた隊長は扉をノックする。
返事がないままガチャッという音とともに扉が開き、中から白い髭を蓄えた顔中皺だらけの男が出てきた。
男はずれた眼鏡を掛け直しながら隊長に言った。

「また神殿兵かい。今度はどんな用じゃ？」
「あなたがダンか？」
「いかにもワシがダンだが……」

ダンは無言で話を促す。
ダンの意を酌み取った隊長はすぐさま口を開く。

「ここに銀髪で赤い眼の少女が泊まっていたはずだが」
「レシィちゃんなら確かに泊まっておったわい。可愛らしくていい子じゃったぞ。して、レシィちゃんがどうかしたのかの？」
「その子の行方が知りたいのだ。何か知らないか？」

ダンは惚けた様子で禿げ上がった頭を掻きながら答える。

「知らん。行き先なんぞ聞いとりゃせんからのう。それにしても、どうして神殿兵が寄って集ってあの子を探しているんじゃ？」
「理由を言えば行き先を教えるか？」
「知らんといっておるじゃろうが」

ダンは意味深に薄笑いしながら知らないと言い張る。
ダンが何か知っていると判断した隊長はしょうがないと言わんばかりにレシィを探す理由を言った。

「なんとあの子が……」
「さあ、何処に言ったか答えてもらおう」
驚きを隠せないダンに隊長は問いかける。
理由を知ったダンは意気消沈しながら、しょうがないと自分に言い聞かせるようにアーカーディアに向かった、と答えた。

駆とレシィは川に水を汲みに向かっていた。
レシィは宿代を支払っているのでレオンの家の手伝いをする必要はないのだが、レシィが自ら手伝うと言ったのだ。
リオンは女の子が一人で川に行くのは危ないからと言って狩りに行ったレオンの代わりに、駆に一緒に行くように命じたのだった。

駆は今、猛烈に気まずい雰囲気の中にいた。
レシィは普段は話しかければ短いながらも返事を返してくれるのだ。しかし今日、というよりも駆と二人きりになってからずっと黙りこんだままなのだ。気まずい事この上なかった。
早く水を汲んでしまいたい駆であったが、レシィを置いて終わらせてしまうのは本末転倒である。
駆はなす術(すべ)なくレシィに歩調を合わせるのだった。

レシィは奇妙なことに水を汲まず、ずっと駆の方を見つめていた。
レシィに無言で見つめられ、圧力に耐え切れなくなった駆は勇気を振り絞って尋ねることにした。

「どうかしたの？」
「あなたは空を飛ぶ乗り物があると言った。でもわたしはそんな物聞いたことがない」

駆は焦りに焦った。
完全に怪しまれてるじゃん！　やばい異世界から来た事バレちまうんじゃないか？　どうしようなんとか誤魔化さないと、そこまで考えて駆は気付いた。あれ？　俺なんで異世界から来た事をこんなに隠そうとしてんだ、と。
元々異世界から来た事を隠そうとしたのは頭がおかしいと思われるのではないか、という考えでかくしていたはずだった。駆はいつの間にか異世界から来た事は隠さなければならないことだと思い込んでしまっていたのだった。
今考えてみると、隠し続けるよりも打ち明けてしまった方がこの世界について聞きやすいのだ。
そう気付くと駆は冷静さを取り戻すことができた。
冷静になった駆はレシィの目を見て、レシィが好奇心のみで質問をしたことが分かった。レシィの目は普段の何倍も輝いていて、心成しか前のめりになっているようにも見える。
駆が何も話す様子がないので、レシィは再度駆に尋ねた。

「空を飛ぶ乗り物ってどんなのなの？　それとも嘘だったの？」
「う、嘘じゃないよ。飛行機は本当にあるよ」

駆が慌てて否定すると、レシィは今までにない早口で質問し始めた。

「ヒコウキはどうやって飛ぶの？　どんな魔法を使って飛ばせるの？　人は何人くらい乗れるの？」

駆はレシィに圧倒されたように答えていく。

「揚力っていうのを使って……」

「ヨウリョクって何？」

「揚力は……飛ぶための力かな？」

「それはどんな魔法なの？」

「揚力は魔法じゃないよ」

「じゃあ、ヨウリョクはどうやって作るの？」

「それは……分からない」

「本当にヒコウキなんてあるの？」

レシィにはうろ覚えの知識を自信なさげに答える駆が本当のことを言っているようには見えなかった。

駆は必死に否定すれば余計怪しいだろうと思い、なんとか嘘つきの汚名を返上する方法を思案した。

「とりあえず宿に帰ろう。そこで揚力を見せるよ」

「わかった」

レシィは素早く水を汲み、早足どころか走るような勢いで宿に戻った。

駆はレシィに置いていかれないよう一緒になって急いだのだった。

宿に戻ってきた駆とレシィの汲んできた水は最初の半分ほどになっていた。

水はまた後で汲みに行くことにして、とりあえず浮力を目に見える形で証明することにした。
駆は唯一の所持品であるカバンからルーズリーフを取り出した。そのルーズリーフをレシィに見せつつ尋ねた。

「レシィにはこの紙を飛ばすことができる？」

レシィは無言で首を振る。
駆はちょっと待ってて、といって紙を折り始める。

「できた！　これが飛行機だよ」

駆が手に持つのは、日本なら幼いころ誰もが作ったことがあるであろう紙飛行機だ。
レシィは紙飛行機を興味深そうに見つめながら、早く飛ばせと駆に無言で訴えかけた。
宿の中で飛ばすよりも外で飛ばした方がいいと判断した駆は、紙飛行機から目を離さないレシィを外に連れ出した。

「じゃあ飛ばすよ」

駆は紙飛行機をなげた。
駆の手を離れた紙飛行機は揚力によって飛び続ける。少しずつ高度を下げていく紙飛行機であったが、撫でる様な優しい風が紙飛行機の飛行を後押しし、紙飛行機は再び空高く舞い上がる。

紙飛行機を大事そうに両手に抱えたレシィは駆の前に来ると疑っ

てごめんなさい、と謝った。
本当に申し訳ないといった風に謝るレシィに駆はたじろぎながら応じた。
「い、いや、この世界には飛行機なんてないだろうし信じられないのもしょうがないよ」
「……この世界？」
この世界、なんて言い方は普通はしない。レシィはその違和感を敏感に感じ取った。
ああ、うん……、などと口ごもっていた駆だったが、レシィの紙飛行機に感動していた様子を見て、レシィには自分が異世界から来た事を教えようと決めた。紙飛行機が飛んでいるのを見ていたレシィの顔は輝いていた。それを見た駆はいつも無表情なレシィの顔が変化するところをもっと見てみたいと思ったのだ。
「俺はさ、信じられないかもしれないけどオーラウンドとは違う世界から来たんだ」
「ニホン？」
「日本はオーラウンドにはない国なんだ。前に言った通り魔法でここまで飛ばされてきたんだ。俺はオーラウンドじゃなくて地球っていう世界に住んでたんだ」
レシィは首を傾げて上目づかいに駆の目をじっと見つめた。そして一言、信じる、とだけ言った。
駆は驚いた。もしかすると異世界から人が来るのはこの世界では珍しい事ではないのかと考えたが、レシィは聞いたことがないらしい。
「こんな嘘みたいな話をなんでこんなに簡単に信じてくれるんだ？」

「わたしはあなたを一度疑った。でもあなたは嘘を言っていなかった。だからわたしはもうあなたのことは疑わない」

レシィの言葉を聞いた駆は気が抜けたように座り込んでしまった。駆はこの世界に来てから誰にも自分が異世界から来た事を話さなかった。そのためレオンたちにも完全に打ち解けることができなかった。会ってまだ二日とたたないレシィだが自分のことを信じると、異世界から来たなんてばかげた話を信じると言われた瞬間に駆は安心したのだ。

自分は一人じゃない。

頼れる人がいる。

今の駆にとってこれほどうれしい事はなかった。

そして、平気なように見えて自分がいかに気を張っていたかということに気付いた。こんな事なら最初からレオンたちに言っておくんだったと駆は後悔した。

座り込んだままの駆にレシィが手を差し伸べる。黙々と考え込んでいた駆には突然手が現れたように感じられ驚いたが、レシィの手だと分かった駆は感謝しつつ手を掴んだ。

「レオンたちにはまだ言っていないんだけど、これから言うよ」

レシィに言う必要はなかったのだがなぜだか言いたくなった駆はレシィにそう伝えた。

レシィは頷くと宿の外に置いてある水の容器を指差して、水が先、と言った。

繋がり

駆、レシィ、レオン、レオンの両親が食卓を囲んでいる。
異世界から来た事を話そうと決めたはいいものの、家族みんなが集まるのは夕飯以降だ。みんなが集まった時に話をしようと考えた駆はみんなが揃うのを今まで待っていたのだ。
みんなで楽しく話している中、駆は心がもやもやしたまま会話に加わっていた。
夕飯が始まれば話し始めようとしていた駆であったが、駆の声はリオンによって遮られてしまった。リオンは席に着くと同時に話の口火を切ったのだ。
そのまま駆はずっと話を切り出せないでいた。どうやって話を始めればよいかを考えている内に黙りこくってしまった駆を見てリオンが声をかけた。

「カケルくん？　どうかしたの？」

駆はこれを好機とみて今まで隠してきたことを打ち明けることにした。

「言わなければいけないことがあるんです」

突然真面目な顔になった駆を見てレシィ以外のみんなが虚を衝かれて疑問符を浮かべていた。

「俺はどうも違う世界から来たみたいなんだ。俺は今までオーラウンドじゃなく、地球っていうところに住んでいた。信じてもらえるかわからないけど聞いてもらいたくて……」

そこまで一息に言った駆は伏せていた顔を上げて、反応をうかがった。
みんな突然の告白に驚いた顔をしていたが、リオンは納得したという顔をして話始める。
「そうだったのね。あなたの着ていた学生服だったかしら？　あの学生服の生地も私見たことなかったもの。チキュウではあんな生地の服ばかりなの？」
レオンも続けて話しだす。
「車や飛行機なんかもカケルの住んでいた所のものなんだろ？　アーカーディアが田舎だからないのかと思ったけど、違う世界のものなんて知らなくて当然だよね」
二人が流れるように会話を続けていくので駆は驚いてしまった。
駆がもし、俺異世界から来たんだなんてことを言われれば、たとえ相手が長年の友人だろうと両親であろうと、こうも簡単に信じることはできないだろう。
「信じてくれるのか？」
駆の疑問にレオンの父が答えた。
「俺は四十年は生きてきたがオーラウンド以外の世界なんてものは聞いたことはないな」
「じゃあ、なんで……」
「俺は異世界も聞いたことはないがな、火打石は使えない、魔物のことを知らない、隣町に行くのに馬車で五日かかるのに驚くようなやつも俺は見たことも聞いたことがないからな。むしろ違う世界か

ら来たっていう方が納得できる」

そう笑って言う様子は駆に大きな安心を与えた。

目頭が熱くなるのを感じながら、震えそうになる声を抑えつつ駆は口を開く。

「ありがとう」

「なんでお礼を言うんだよ」

笑いながらそう言うレオンに、駆は言いたくなっただけだよと返して顔を伏せる。潤んでいる目を見られるのが恥ずかしかったのだ。

「カケルくんの世界について色々教えてほしいわ」

柔らかな笑顔で語りかけてくれるリオンが自分の母親に重なり、駆は望郷の念にかられた。

駆もただの高校生だ。ファンタジー小説を読みながらこんな冒険してみたいな、と考えたこともあるが、未だ親の庇護される立場にあった駆にはこの世界は厳しすぎた。水道もなければ電気もない。夜に外に出れば魔物に遭遇するかもしれない。元いた世界の普通すぎてつまらないと思っていたことが恋しくなる。苦手だったクラスメートですら今は会いたくてたまらない。

元の世界に帰りたいという気持ちが大きくなったところでリオンに声をかけられた。

「カケルくん？　どうしたの？」

「あっ、いや……」

駆は考え込んでいたことに気付くと同時に暗い気持ちが途切れた。そして、この世界でのいい思い出が脳裏に浮かぶ。

レオンの家の隣に住む夫婦は農作業の時間に色々な話を聞かせてもらったし、アーカーディアの村長は久しぶりに村に来た客だからと言ってアーカーディアの歴史について長々と語ってくれた。正直言うと駆にとって村長の話は退屈なものだったけれども歓迎してくれているという気持ちは伝わってきた。レオン家には部屋を提供してもらった。レオンにはイノシシから命を救ってもらった。そして、レシィが信じてくれたおかげで気が楽になった。

駆はやっとオーラウンドにいると実感することが出来た。今までは魔法や魔物など、なんとなく小説を読んでいるような気分であった。だが、この世界の人々から受けた優しさを思い出したことでオーラウンドに、今まさに、駆が生きていると認めることができた。

昔より今を大切にしないとな。というか異世界に来たってことを俺が認めたくなかっただけなんだよな。なに現実逃避してんだよ。と駆は心の中で自嘲する。

駆はただ恐かったのだ。両親から受ける無償の愛が、友達との築いてきた友情が、地球で得たすべての繋がりが異世界に来たことで切れてしまったように感じたのだ。駆は自分が”誰とも繋がりを持たない”という孤独の中にいる様な気がした。まったく知っている人のいない世界にいることが恐くてたまらなかった。

しかし、駆がレオンに助けてもらったときに、すでにこの世界で繋がりを持つことができていたのだ。あの時、あの瞬間、駆にとってオーラウンドは知っている人のいない世界ではなくなっていた。

繋がりがなくなるのが恐いなら繋がりを作ればいい。

レオンたちとの間にできた繋がりは、駆を孤独から完全に救いだした。

レシィに信じると言われたときの安心は、一人じゃないと言葉で伝えられたから。言葉にされなくとも繋がりを感じられるようになった今、駆は真に孤独から脱することができたのだ。

元の世界に帰るその時までこの世界を楽しんでやる、そうポジティブに考えることに決めた駆は周囲が心配そうに自分のことを見て

いることに気付いた。駆は慌てて口を開いた。

「俺の世界について、か。たくさんありすぎて何から話していいかわからないな」

そう答えた駆はこの世界に来てから一番いい表情だった。

駆とレオンがレシィに出会った場所、そこに二十人から三十人の神殿兵がいた。休憩しているのであろうか、隊列は崩れ中には座っている者もいる。

そんな中、悠然と立つ隊長に一人の兵士が尋ねる。

「隊長。いつまでここにいるのですか？　もう村はすぐそこにあるっていうのに。夜に村の外にいるのは危険ではないでしょうか。すぐに村に入って異端者を確保した方がよいのではないですか？」

魔物は夜行性であり、村の外は魔物が蔓延(はびこ)り危険である。

魔物は自分の本能に従うものが多い。中には少し知能がある魔物もいるのだが、基本的には普通の動物以下である。自分の本能に従う魔物は偶(たま)に起こる例外を除いて、村には多くの人間がいて自分が殺される可能性があることを感じるため、村に降りてくることはほとんど無い。そのため村の中は魔物に襲われる心配はほとんどないのだ。

そうであるにもかかわらず、隊長はいつまでも兵士たちを村の外で待機させている。そのことに疑問を持った兵士の一人が隊長に尋ねたのだった。

「お前は異端者の能力は知らないのか？」
「はい。どういった能力かは聞いたことがないです」
「そうか」

隊長は一呼吸置き、再び話し始める。

「夜、本当に危険なのは魔物じゃない。異端者の方がより危険だ。ここに待機しているのは朝になるまで待って異端者の能力を抑える意味がある。それに俺たち二番隊は魔物なんかにやられはしないだろう？」

そう口角を吊り上げながら隊長が問いかけると同時に隊長の後ろから声が上がった。

「魔物だ！！」

その言葉が聞こえると同時に隊長が振り向く。
そこには黒い煙に覆われた黒い巨体があった。駆がこの世界に来てすぐに出くわしたイノシシによく似ているがところどころ違いがある。
茶色だった体毛は黒く染められ闇と同化しているように見える。黒かった瞳は血のような赤に染められている。体は普通より大きいと駆には感じられたイノシシの二倍もの大きさで、特に牙は獲物を仕留めやすくするために発達したかのように太く大きかった。

禍々（まがまが）しいとしか形容できない姿のイノシシに、一切怯えた様子を見せずに兵士たちは向かっていく。
イノシシが突進するたびに木々がなぎ倒されていくが兵士たちが

その突進に当たることはなかった。一直線にしか進むことのできないことをいいことに、兵士たちは鎧で重くなった体を精一杯動かして避ける。確かに速く破壊力のある突進であるが、どこに向かうか判(わか)れば避けられないものではない。

兵士たちは進路変更をする時を見計らってイノシシに攻撃を加える。堅い体毛に阻まれてなかなか致命傷とはいかないまでも、徐々にイノシシの体毛を削っていく。身体強化の魔法を使っている兵士たちの剣はイノシシに重傷ともいえる傷を負わせるようになってきた。

このままでは殺されてしまうことを理解したイノシシは逃げようとするが、真っ直ぐにしか走ることの出来ないイノシシは木にぶつかり勢いを削がれてついには止まってしまう。その隙を見て再び兵士たちがイノシシを攻撃し始める。

窮地に立たされたイノシシは一人離れたところで腕を組み立っている隊長が目に入った。隊長までの距離はかなり遠く、そこに至るまでイノシシを阻む木は一本もない。向こうに行けば逃げることができると考えたイノシシは隊長目掛けて突進した。

「隊長!!」

先ほど村に入らない理由を尋ねた新米の兵士がまったく動こうとしない隊長を見て声をあげる。隊長はその声も、迫ってくるイノシシですら気にしていないかのような緩慢な動きで自分の剣に手を掛ける。

イノシシは逃げれると考え走る速度を落とさず、むしろ隊長をはね飛ばそうと速度を上げる。

隊長は抜いた剣を上段に構えて、一気に振り下ろす。隊長の重い剣はイノシシの頭を潰すように切った。イノシシは声にならない声をあげて絶命した。

「隊長お怪我はありませんか？」
「大丈夫だ。お前も怪我はしていないな」
「はい。相変わらず逃げることにしか集中できず、切りつけることはできませんでしたが怪我はしていません」
「それでいい。最初は怪我をしなければいいんだ。攻撃はできなくともな」

隊長がふと右を向くと頭が二つに分かれたイノシシが目に入った。イノシシの死体からは黒い煙が出ていたが、煙は地面に吸われるように消えてしまった。
新米の兵士は隊長が見ていたものに気付いて話をふった。

「あの黒い煙は何なんでしょうね」
「俺にもわからん。だがあの煙が魔物を作り出しているのは間違いないだろうな」

そう言った隊長は大きな声で兵士たちに見張りを二、三人残して後は休息を取るよう指示した。

「考えても解らないものは解らない。お前も明日に備えて早く寝るんだな」

隊長は返事をして皆の下へ向かう兵士の背中を見送って呟いた。

「必ず捕えて見せるぞ……闇の使い手」

レシィの秘密

駆がレオンたちに素姓を明かした次の日の朝、いつものんびりとしたアーカーディアは慌ただしい雰囲気に包まれていた。村人はみんなして突如現れた神殿兵を遠巻きに見て騒いでいた。

王都から遠く離れた、それも争いとは無縁のアーカーディアに兵士が来ることなどほとんどない。多くの村人は神殿兵のことは話で聞いたことがあるくらいで実際に見たことがあるというものは少ない。

「ありゃあ神殿兵でねえのかい？」

「あの胸の紋章はそうにちげえねえ。どうしてこんな所に来たんだ？」

口々に疑問を口にする村人たちだったが神殿兵に話しかけに行く勇気のあるものはいなかった。

村人が囁き合っている内に隊長が整列し終えた兵士たちに隊長が指示を出す。

「四日前と同じだ。何か分かったら俺に伝えろ」

「はっ！」

隊長の指示とともに兵士たちは散り散りに話を聞きに行った。

五分と経たずにレシィがレオンの家に泊まっているという情報を手に入れた神殿兵は、隊長の指示の下レオンの家に足を向けた。

朝、目を覚ました駆はリビングに向かった。
今は時間で言うと午前六時と言ったところだろうか。農業に従事している家では早起きが基本である。遅寝遅起き、学校には遅刻寸前が基本だった現代の若者らしい不健康な生活を過ごしていた駆も早寝早起きという習慣が身に付いた。それでも今レオンの家に住む人の中では一番遅い起床だ。駆がリビングに着くころには駆以外のみんなが席に着いていた。
リビングに入ってきた駆にレオンが声を掛けた。

「もう朝ご飯はできてるよ」
「待たせちゃったかな？」
「いや、そんなことはないよ。ご飯はみんなで食べたいからね。ご飯ができてたら呼びに行ってたよ」
駆は本当の家族のように接してくれるレオンに照れた笑みを返した。

食事が終わると駆がこれからどうするのかという話題になった。
「カケルはこれからどうするの？　ここに泊まり続けるのは構わないけど、ここにいても元の世界には帰れないと思うよ」
レオンの質問に駆は以前考えたことを話す。
「とりあえず王様に会ってみようかな、と思ってるんだけど……」
駆の言葉にみんなは意味がわからないといった表情になる。

「どうして王様に会いに行くんだ？　話が全然見えないんだけど」
「うーん、やっぱりフラグを立てないといけないと思うんだよね……」

駆の独り言のような呟きにみんなはふらぐ？　と疑問符を浮かべた。駆はなんでもないと誤魔化す。
異世界ものの主人公はだいたい王様とかに会うだろ、といった勝手なイメージで思いついたことだったので特に理由があるわけではなかった。

「庶民が国王に会うのは無理だと思うよ」

レオンのもっともな意見に駆は確かに、と頷く。
そこにレシィの助け船が入った。

「王都に行くのは良いかもしれない。本がいっぱいある」

レシィの言うとおりだ。王都はありとあらゆる文化が集まってくる。王都はさまざまな情報が集結する場所なのだ。
駆が今一番必要なのは情報である。この世界では異世界が認識されているかどうかですら、今はあやふやなのだ。もしかすれば、たくさんの本の中には地球に帰る方法が記されているものもあるかもしれない。そう考えると今後の目標は自ずと決まった。

「王都に行く。これが今の俺の目標かな」

ただ、王都に行くことは駆が考えているほど簡単なことではなかった。

「カケルくんはお金を持ってないわよね。馬車を使えないとなると歩いて行くしかないけど、それだとどんなに急いでも半年はかかるわよ」

リオンが駆に現実を突きつける。

そう、いくら魔法が当たり前のファンタジーな世界でもお金は必要だ。馬車を使うにしてもお金はいるし、馬車の料金とは別に護衛も雇わなければならない。残念ながらアーカーディアでは自給自足が基本で商人が来ることは稀である。商人の馬車に同乗するならば護衛は最初から商人が雇っているが、そうでないならば自分で護衛を雇う必要がある。日本とは違いここには盗賊もいれば魔物もいる。気軽に旅行などはできないのだ。

「どうしようかな……」

今の駆にはどうすることもできず、悩むことしかできなかった。

そんな風に話をしていると外が騒がしくなってきた。

なにかあったのかしら、とリオンが呟くと同時に村人の一人が家に飛び込んできた。

あまりの慌てようにリオンはなにかあったの？　と尋ねる。

「村に神殿兵が来たんだ」

「神殿兵が？　アーカーディアに何の用かしら」

「そんでそこにいる嬢ちゃんがどこにいるか聞きまわっているぞ」

村人はレシィを指差しながら言う。
レシィはいつもの無表情を崩し、焦ったような表情になる。
レオンの父は明らかに焦った様子のレシィに話しかける。
「神殿兵に見つかるとまずいのかい？」
レシィはこくんと首を縦に振った。
「君がなぜ追われているかはわからない。だけどね、私は君が悪い事をするような子じゃないっていうのは知っている」
レオンの父はレシィの目を見て一呼吸置くと優しい笑みを浮かべて言った。
「裏口から逃げなさい。村長の家の近くの道から隣の村に行けるはずだよ」
「何も聞かないの？」
レシィがそう尋ねるとレオンの父は早くしないと捕まってしまうよ、とレシィを急かした。
「カケル、レオン。レシィちゃんを村の外まで送り届けてやるんだ」
駆もレオンも現状を把握できていなかったが、とりあえず頷くとレシィを連れて裏口に向かった。
駆たちが出て行ったのを確認した村人はレオンの父に尋ねた。
「あの子を逃がしてよかったのか？」

レオンの父は苦笑しながら答えた。

「駄目だろうな。もしかすると罰されるやもしれん」

「ならどうして逃がしたんだ？」

「なに、あんなに可愛い子が怯えてる姿を見たくなかっただけさ」

リオンは流石私の旦那ね、といって笑い始めた。

レオンの父は真面目な顔になると村人に逃げるよう言った。

「お前はここにいない方がいい。とばっちりを受けるぞ」

「もう、神殿兵も来るだろうしな。悪いが俺は退散させてもらうよ。気をつけてな」

村人が出ていくとレオンの父はリオンの方を向いた。

「お前はここに残るんだろう？」

「ええ、ここは私の家なのよ。出ていく必要がないわ」

レオンの父はリオンの強気な答えに苦笑する。

数分の内に鎧のこすれあう音が外から聞こえてきた。音が一度止み、ノックの音が聞こえたのち扉が開いた。

扉を開けた男が話し始める。

「ここにレシィという少女が泊まっているはずだが、どこにいる」

高圧的に尋ねてきた隊長に対抗するかのようにレオンの父も尊大な態度をとる。

「悪いが素姓のわからないものに教えることはない」
「この紋様を見てわからないのか！！」
隊長の周りに控えていた兵士の一人が胸の紋様を指して詰め寄ろうとする。
「構わん」
隊長は右手で兵士を制すると自己紹介をし始める。
「俺は神殿兵二番隊隊長アーバス・キャプトだ」
「神殿兵の隊長がなぜレシィちゃんを探しているんだ？」
レオンの父からダンと同じ雰囲気を感じ取ったアーバスは理由を話した。
「あの娘は闇の使い手だ」
簡潔な説明であったが二人に与える衝撃は凄まじいものだった。
目を見開いて驚いているリオンたちに痺れを切らしたアーバスはレシィの居場所を言うよう促す。
「居場所を教えてもらおうか」
呆然としていた二人は声を掛けられたことにより、さっきの言葉を理解することができるようになった。思考が再起動するも、得た情報を処理しきれない。
闇の使い手なんてものは普通出会うことはない。

本当に闇の使い手なんてものが存在したとは。
まさかレシィちゃんが闇の使い手だなんて。
様々なことが二人の頭を占めていく。しかし、二人の答えはアーバスと話す前から決まっていた。それはレシィが闇の使い手だと聞いた今でも変わらなかった。
「レシィちゃんの居場所を教えるつもりはない」
レオンの父のきっぱりとした拒絶に神殿兵は皆、驚いた顔をする。
「闇の使い手だぞ。それでも言わないというのか？」
「私は彼女の行き先を言うつもりはない。わかったら帰ってくれ」
アーバスはリオンを見るも、リオンもレオンの父と同様に目で拒絶の意思を示していた。
アーバスはより威圧的な態度をとった。
「ユーリ様の意に沿わない。そういう意味か？」
アーバスは殺気を孕みながら言う。神殿兵、それも隊長格の人間の殺気ともなると一般人に耐えるのは難しい。命を賭けて闘ったてきた者の殺気に二人は圧倒される。それでも震えそうになる声で言葉を紡ぐ。
「あの子の居場所を教えるつもりはない」
怯えていたリオンもその言葉を聞いてふっきれたかのように敵意を持った目でアーバスを睨みつける。
神殿兵はユーリ教に帰依する人間の集まりだ。当然怒りを表し始

めた。

「異端だ！！」

「異端審問をするまでもない死刑だ！！」

「ユーリ様の意思にそぐわない者は死あるのみ！！」

兵士たちが騒ぎ始める。リオンたちは兵士のあまりの剣幕に恐ろしくなってきた。それでもリオンたちの意思は変わらない。

二人の様子を見たアーバスは後ろを振り返る。

「闇の使い手は近くにいるだろう。早く探せ！」

「この者たちはどうするのですか？」

「ほっておけ。今は闇の使い手が先だ」

「しかし……」

「早くしろ！！」

アーバスの有無を言わさぬ様相に兵士たちは慌てて外に駈けていく。

アーバスは再びリオンたちの方を向くと次はない、と言って出て行った。

その場に残った二人は安心したのか、寄り添いあった。

「レオンたちは大丈夫かしら」

不安げに呟くリオンを安心させるように、レオンの父はリオンの肩を抱いた。

遁走

周りに生い茂る木々によって光の遮られた小道。普段人が通らないのか道には雑草が繁茂している。人が通る道というよりも獣道といった風である。その道を駆たちが遁走している。駆たちは足元に広がる雑草を踏み分け出口を目指す。

三分とたたずに小道を抜けた。小道を抜けた先は川が隣に流れる、人が三人ぎりぎり並べる程度の幅の狭い道だった。

小道はそれほど長くなかったが、駆一人は息絶え絶えになっていた。レオンが足が速いのはともかく、レシィも尋常じゃなく足が速かった。駆は一カ月もの間不良たちから逃げてきたという実績からわかるとおり学校でも足の速い方だった。陸上部の部員に勧誘されたこともある駆の数少ない自慢できることの一つだ。

その駆が二人にはまったく追いつけそうにもなかった。駆が遅れているのに気付いて速度を緩めてくれたぐらいだった。駆はたまらず声をあげる。

「ふ、二人とも……。ちょっと休憩しない……？」

「ああ、そうしようか。でもあまりゆっくりはできないよ」

こんなときに足を引っ張ってしまって申し訳ない気持ちになる駆であったが、思わず驚きを表した。

「二人とも足速すぎ……」

「前に言ったけど俺は身体強化ができるからね。レシィも魔法が使えるんでしょ？」

レオンの質問にレシィはこくりと頷く。

「驚かないの？」

やっぱりといった風なレオンにレシィが尋ねる。

「君みたいに華奢な女の子が一人で、それも武器も持たずに森を抜けてくるなんて魔法使いとしか考えられないからね。レシィは顕在魔法も使えるの？」

レシィは再び肯定する。

知らない言葉が出てきたため駆は好奇心に任せて尋ねた。

「顕在魔法って何？」

レオンは駆の息が整ってきたのを見て進みながら説明するよ、と言って歩き始めた。

「顕在魔法っていうのはね、目に見えて魔法を使っているってわかる魔法のことだよ」

「火を出したりできるってこと？」

「そうだね。あと身体強化とか目に見えない魔法は潜在魔法っていうんだよ。顕在魔法を使える人はだいたい潜在魔法も使えるけど、潜在魔法が使えても顕在魔法が使えないって人は結構いるみたいだよ。俺も潜在魔法しか使えないんだ」

へー、とぼんやりと考えていた駆にレオンがもうそろそろ走れる？　と尋ねた。

息も整ってきた駆は頷いた。

走っては休憩してを何度も繰り返していた三人はようやく馬車も通れるような幅の広い道にでた。駆からしてみれば車一台が通るのも難しい狭い道だったが、この世界の住人からすると広い道と感じられるようだ。

休憩した回数が十回を超えたあたりで駆はあることに気付いた。

「俺が一緒に逃げる必要なくないか？」

そう。流れで一緒に逃げてきた駆であったが、足手まといになっている今、身体強化のできる二人を先に行かせた方が断然効率が良いのだ。そもそもレオンには隣の村まで案内できるとしても駆にはできない。最初から二人で行かせた方が良かったのでは、と駆は考えた。

「二人で先に行ってくれ。二人にはついていけそうもないよ」

「カケルを一人ここに置いていくのはまずいよ。このあたりでも稀に動物が出てくるからね。最後まで行くしかないよ」

駆はがっくり項垂れながら呟く。

「最初から家にいればよかったな……」

その呟きを聞いたレオンはそれもまずいと言う。

「神殿兵っていうのは過激な集団なんだ。オーラウンドに生きる全ての人間はユーリ様を信仰しなければならないって教えを守るために従わない人を異端審問と称してどんどん殺しているんだよ。父さんもあのまま家にいるのは危険だと思ったから、カケルにも行くように言ったんじゃないかな」

「それじゃあリオンさんたちが危ないじゃないか！！」

駆にはレオンがどうしてそんなに冷静に言えるのか解らなかった。自分の親が危険かもしれないのにどうしてこんなにも冷静なのか。

「カケル。父さんや母さんは僕たちのためにあの場に残ったんだ。それを無駄にしちゃいけないよ」

「っ、でも……」

「父さんはレシィを頼むって言ったんだ。ちゃんとレシィを守り通さないと。父さんたちは大丈夫さ。きっと大丈夫」

自分に言い聞かせるように大丈夫を連発するレオンに駆は何も言えなくなった。

今まで黙って聞いていたレシィが話し始めた。

「わたしのせい、ごめんなさい」

レオンと駆はあわてて否定するがレシィは構わず続ける。

「わたしといると不幸になる。二人とも早く帰った方がいい」

諦めたようにそう言うレシィに駆はむしろそれに反抗したいと思った。するなと言われるとしたくなるようなものである。

「俺は最後まで一緒に行くよ。レシィのことは任せられたんだ。最後まで一緒にいるよ」

レオンもそれに同意する。

「俺もカケルと同じ意見だな」

レシィはそれ以降何も言おうとしなかった。

「じゃあ出発しよう」

レオンの言葉とともに再び走り始める。

このペースのままで行くとしても隣の村まであと五日はかかるだろう。もう少し王都に近ければ村と村の間隔はもう少し短いのだが、アーカーディアはいかんせん田舎である。村同士の間隔は長い。歩いて隣の村に行くのは厳しい。

まず夜をどう乗り切るかが問題だ。魔物が出てきたときどうやって対応すればいいのか。レオンたちは誰一人として武器を持っていない。今のままでは普通の動物にも対応しきれない。

オーラウンドでの動物の基準は地球の基準とは少し違う。駆が最初に遭遇したイノシシにしても、もし日本で見つかれば突然変異なんて新聞で話題になるのではないか、というくらいの大きさであった。魔物だけでなく、普通の生物にも気を払わなければならないため村の外は危険なのだ。

レオンはレシィに頼るしかないと考えていた。一人でアーカーディアに辿り着いたレシィなら何とかできるだろう。何の確証もないが今のレオンにはレシィに頼ることしかできなかった。

「レオン！！　もうちょっとゆっくり走ってくれ！！」

駆がレオンを後ろから呼びとめる。考え込んでいたレオンはいつの間にか速く走っていた。レオンが足を止め振り返ると、疲れきってもう走れないといった駆と余裕のある走りをみせるレシィ、そして遠く向こうには馬に乗った神殿兵が見えた。

「カケル、レシィ！　神殿兵だ！　森の中に隠れろ！」

神殿兵はまだかなり遠いところにいるがレオンはとりあえず森の中に身を隠すことにした。距離はあるが十分に人の特徴が確認できる距離だ。

駆とレシィは急いでレオンと合流した。

「レオン。どうするんだ？」

「たぶんレシィがいることはばれたと思う。森の奥に逃げるしかない」

森は奥に行けばいくほど危険だが今はそうも言っていられない。十人以上もいる神殿兵と出会うかどうかわからない森の生物なら後者の方が安全だろう、そう考えたレオンは森の奥に進むことにした。

「カケル、まだ走れるか？」

「大丈夫。まだ走れるよ」

そうは言うものの駆はもう限界だった。レオンは駆が無理をしているのは百も承知だった。目に見えて疲れている駆に無理をさせることに申し訳なさを感じつつレオンは走り始めた。

「あの茂みに隠れよう」

レオンが隠れるのに適した茂みを発見した。三人が隠れるには十分な茂みだ。

「カケル、大丈夫か」

「ああ……でも少し休ませて……」

駆はもう限界のようだった。それを見たレシィが提案をした。
「わたしが背負って走る」
「えぇ！　それはちょっと……何と言うか悪いよ」
「このままじゃ捕まる」
確かにレシィの言うことは正論だ。ただ駆の中の何かがそれを拒否する。女の子、それも明らかに年下であろうレシィに背負われることに恥ずかしさを感じたのだ。
「レオンが背負ってくれないか？」
同じ背負われるならレオンに、と考えた駆はレオンに頼んだ。
「彼も疲れている。あなたを背負っては長く走れない」
「それならレシィも……」
駆は言われるまで気付かなかったがレオンもかなり疲れているようだった。走った距離は一緒なのだからレシィも疲れているはずなのだが、駆が見たところレシィは汗一つかかず、息も切らしていなかった。
「カケル。悪いけどレシィに背負ってもらってくれ。身体強化しているとはいえ魔力が少ないから疲れるんだ」
レオンにそう言われると、駆は諦めるしかなかった。
駆の前に背を向けたレシィが屈(かが)んでいる。レシィの背中は細く、

とても駆を背負えるようには見えない。果敢(はかな)無げなレシィの背中が駆に躊躇いを生んだ。
駆が躊躇っている間、いつまでも背中に乗ろうとしない駆に痺れを切らしたレシィは駆の足を払い、背中を支え、膝の裏に手を差し込んだ。所謂お姫様だっこだ。

「えっ？　ちょっと、レシィ？！」
「いつまでも乗らないから」
「でもこの体勢は恥ずかしいんだけど」

駆の言葉を無視してレシィは走り始めた。
駆は至って平均的な男子高校生である。身長から体重、顔に至るまで日本の高校生のちょうど中間程度。唯一優れていたのは足の速さくらいだ。
対してレシィは雰囲気こそは大人びているが、体型は幼い。そんなレシィが駆をだっこしているのはかなりアンバランスだ。しかし駆を抱えているレシィの走る速度は先ほどよりも速い。

「レシィ、大丈夫？」

駆の質問にレシィは首肯で返す。レシィは変わらず涼しい表情だ。
問題はむしろレオンの方だ。速くなったレシィについていくのに精一杯の様子だ。

「レオンは大丈夫なのか？」

駆の質問に返事する余裕がないようで、レシィと同じく首肯で返す。
駆は自分だけが楽をしている状況に歯がゆさを感じた。自分にできることをしなければならない、駆は強くそう思った。

森に入る前に見た神殿兵の数は十人程度だった。森を虱潰しに探すのは少なすぎる人数だ。駆はこのまま逃げ続けるよりも隠れる方がいいと気付いた。

「逃げるよりも隠れた方がいいんじゃない？」

駆の言葉にレシィが足をとめた。それに合わせてレオンも止まった。レオンが息を切らして苦しそうに喘いでいる間、レシィが口を開いた。

「すぐにばれる」

そう言ってレシィが指差した先を見ると荒々しく踏みつぶした雑草や折れた枝があった。普段人の入らない森故に余計に目立つ。これでは自分たちの位置を知らせているようなものだ。

「なら一人で先に進むよ。これから先、役に立てる気がしないし……。二人は隠れていてくれ」

息の整ったレオンが駆に反論する。

「何言ってるんだよ！！さっきも言ったけど村の外を一人でいるのは危険なんだ。それに父さんにレシィのことを頼まれただろう！」

「だからだろ。これが一番効率がいいじゃないか！」

「わかった。なら、俺が囮になる」

「だから俺が……」

「カケルのスピードじゃすぐに捕まるだろ。俺の方が長い間神殿兵を引きつけることができる」

レオンの言葉に駆は反論できなかった。

「でも神殿兵に捕まったらまずいんじゃ」

レオンから聞いた話から考えると、レシィを庇っているとばれると危険なのだろう。

「それはカケルも同じだろ。俺の方が逃げ切れる確率高いしさ。ただ、レシィは必ず隣町のエスファハンに送り届けろよ。約束だからな」

レオンはそう言うと走っていった。

レシィは駆の顔を覗き込んだ。駆は何かを耐える様な顔をしていたが、レシィの手を引いて見つかりにくそうな茂みに隠れた。

レシィが不安げに尋ねる。

「いいの？」

「うん。レオンならきっと大丈夫さ」

自分に言い聞かせるかのように駆は呟いた。

しばらくすると馬に乗った神殿兵がさっきまで駆たちがいた所を走り抜けていった。

馬では小回りが利かずあまりスピードが出せないようだ。レオンも逃げ切ることができるだろうと駆は思った。

ほとんどの神殿兵が行って安心した雰囲気になった駆とレシィであったが、最後尾を走る男が馬をとめた。

前を走っていた者たちは気付かずに行ってしまった。

男は駆たちが隠れている茂みの前に立ち、言い放った。

「隠れてるんだろ。出てこい！！」

お人好しの作る笑顔

威圧的な男の声が響く。駆は必死に頭を回転させるが簡単には解決策は思い浮かばない。

駆はレシィの方を向くと諦めるしかないといった風に首を振っている。

駆が茂みから顔を出すとそこには貫禄のある初老の男性が立っていた。髪が白髪混じりでなければ三十代半ばと言っても過言ではないような精悍な顔つきをしている。神殿兵二番隊隊長のアーバスだ。

アーバスは最初から位置が分かっていたかのように駆たちの方を向いていた。

「くそっ、なんでばれたんだ……」

そう小声でついた駆の悪態はアーバスの耳に届いていたようだ。

「その娘の気配は確かに感じ取れなかった。だが、貴様は息を殺し切れていなかった。それが理由だ」

アーバスは駆から発せられた僅かな気配を察知したというのだ。

馬に乗りながら気配を察知できたアーバスの異常さに気を向けることもできず、駆は自分の情けなさを嘆いた。ここまで自分が役に立てたこともなく、むしろ足を引っ張ってきた。そして、今は神殿兵に見つかるきっかけを作ってしまった。あまりの不甲斐無さに歯噛みする駆であったが、すぐに気持ちを切り替える。

アーバスの鋭い鷹のような目。そこから発せられる何かが辺りを支配している。それは同級生との喧嘩くらいしか経験したことのない駆にも、アーバスが戦い慣れていることを感じ取らせた。

なにも反応しない駆に業を煮やしたアーバスが声を発する。

「貴様もその少女を渡すつもりはないのか？」
「ああ、渡すつもりはない」

レシィを隣の村まで送り届けると決めたのだ。駆は一度決意した事を途中で投げ出す気はなかった。
足は震え、勝手に逃げるために走りだそうとする。それを抑え込み、アーバスと対峙する。

「その少女が闇の使い手だとしてもか？」
「えっ……」

突然の言葉に驚いた駆がレシィの方を向くと、レシィは駆から目をそらした。そして申し訳なさそうに話した。

「その人が言っているのは本当。今まで言わなくてごめんなさい」

ごめんなさい、と言う時に駆と合わしたレシィの瞳には僅かに怯えが混じっていた。
駆は言葉が見つからず黙り込んでしまった。

「やはり知らなかったか。理解できたなら邪魔をするな」

闇の使い手だと解ったら邪魔をしないのが当たり前かのようにアーバスが言う。その言葉にレシィは悲しそうに目を伏せた。その様子から今までアーバスの言うとおりであったことが容易に窺えた。
やはり唯一の宗教ということでユーリ教は根強く信仰されているようだ。今までレシィを庇ってくれるような人はいなかったのだろう。
だが、駆は地球で生まれたのだ。この世界の宗教なんて関係なか

った。

「悪いけど理解できないわ。俺にはユーリ教なんて関係ないし。レシィが闇の使い手だろうが渡すつもりはない」

はっきりとした駆の言葉にアーバスは驚く。今までアーバスは闇の使い手を幾度となく追いかけてきたが抵抗されたのは片手で足りるほどだ。実の親でさえ自ら神殿兵に子を預けに来ることもある。そうであるにも拘らず今日はすでに三人も抵抗してきた。

「邪魔をするなら命は補償せんぞ」

リオンたちに向けた時と同様に殺気を放つ。

駆は少し怯んだが意見を変えることはなかった。

「お、俺はレシィを渡すつもりはない！！」

アーバスの殺気に屈しないように、自らを鼓舞するかのように駆は声を張り上げた。

アーバスは担いだレシィよりも明らかに大きい剣を抜く。

「あくまでも邪魔をするんだな。ならお前も同罪だ」

アーバスは大きく振りかぶった大剣を駆目掛けて振り下ろす。

筋力、剣の重さによって剣は目視できないような速さで振り下ろされた。だが、剣が駆に当たるはなかった。

駆は危機察知能力によってなんとか避けることができたのだ。

「あれを避けるか……。ただの農民ではないな」

アーバスが声を漏らしたのも気にせず駆は声を荒げる。
「俺も同罪だって？　レシィが何の罪を犯したっていうんだよ！！
闇の使い手だってだけで、うおっ！？」
駆が話している途中でアーバスが切りかかってきた。駆はなんとか避けたが浅く腕を切られた。
「闇の使い手であること、ユーリ教の教えに背くことが罪だ」
アーバスは淡々とした口調で言う。
しかし、今の駆にはそれを聞く余裕はなかった。
先ほどアーバスによって作られた小さな傷は、駆に剣が人を殺すためのものであることを思い出させた。小説を読んでいるような気持ちでいた駆は痛みによって一気に現実に引き戻された。剣が当たれば怪我をするし、悪ければ死んでしまうのだ。そのことを理解した瞬間、駆は頭の中が真っ白になる。
呼吸が乱れ、足が震える。あらためて腕に着いた傷を見て顔が真っ青になる。駆を恐怖という感情のみが支配する。逃げたくても足が言うことを聞かない。暑くもないのに汗が頬を伝う。駆は息をするのも忘れてその場に立ちつくした。

駆が戦意を喪失していると判断したアーバスは本来の目的であるレシィに襲いかかった。
レシィは向かってくる剣を避けて距離をとる。アーバスを中心に円を描くように時に木の影に隠れ、時にフェイントを加えアーバスを撹乱させながら動き回る。そしてどこから出したのか黒色の剣を

使って反撃する。装飾のない一メートルほどの細い剣を使うレシィは攻撃を正面から受けることなく、スピードを生かして避け、隙を見てアーバスに攻撃を加える。しかし、分厚い鎧に阻まれてまったくダメージにつながらない。鎧のない関節部を狙うも防がれてしまう。

レシィは身体強化によりかなりの速さで動いているのだが、重たい鎧を纏っているアーバスはレシィの速さに惑わされることなく剣で切りかかる。大きな傷を受けてはいないが、レシィの身体には小さい傷が目立ち始めた。

アーバスがレシィの動きに合わせてその場で回るだけなのに対して、レシィの運動量は比べものにならないくらい多い。体力にはもちろん限りがあり、今までよりも速く、そして急に止まったり、方向転換するのでレシィの足には大きな負担がかかっていた。

レシィの動きが鈍くなってきたところで、アーバスはレシィの進行方向に足を出す。アーバスの繰り出す斬撃にだけ注意を向けていたレシィは為すすべなく転んでしまった。レシィは転んだ拍子に声を漏らした。

「きゃっ！」

声に気付いた駆は音の発生源に目を向けた。

そこには倒れたレシィとレシィを見下ろすアーバスがいた。アーバスがゆっくりと剣を振り上げ、目を閉じる。うつ伏せに倒れているレシィはそのことに気付いていない。

「レシィ、危ない！！」

駆がレシィに声をかけると同時に、アーバスの剣が振り下ろされ

た。
サクッ、という柔らかいものに金属がささる音がした。ちょうどスコップで土を掘るときのような音だ。アーバスの剣はレシィを捕えることはなく土に突き刺さっていた。間一髪のところで避けることができたのだ。
レシィは剣を引き抜こうとしているアーバスから距離をとると、目を閉じて集中する。

「なんだ！？」

駆の目の前に不思議な光景が広がった。
レシィの周りの影がグニャグニャと動き始めたのだ。影は地面から植物のように生えてくる。それが集まり黒い塊が形成されていく。
剣を引き抜いたアーバスは、黒い塊の存在に気付き慌ててレシィに向かってくる。

「魔法を使わしてたまるか！！」

ものすごいスピードでレシィに迫るアーバス。
グニャグニャと蠢(うごめ)いていた黒い塊はアーバスの姿を確認すると動きを止め、丸みを帯びていた体を広げ、アーバスを包み込こもうとした。
車と同じで、凄まじい速さでレシィに迫ってきたアーバスには急に止まることはできなかった。アーバスは避けること諦め、闇に切りかかった。
アーバスが剣を振った先にあった闇は剣の軌跡通りに晴れた。しかし、縦に分離させられた闇からは細い触手が伸び、絡み合い再び一つになり始める。間を駈け抜けようとしていたアーバスの足に闇が絡みつく。すぐさま振り払おうと剣を振りかざすアーバスであったが、闇はどんどんとアーバスの身体を飲み込んでいく。そして首

元まで来た闇は浸食を止めた。

「どうしたのだ、異端の娘。俺を殺さないのか？」

そう尋ねられたレシィはひどく疲れた様子でこくりと頷く。

「あなたが……これからわたしを追わないと約束するなら……殺さない……」

猛スピードで走っても疲れた様子を見せなかったレシィがかなり消耗していた。レシィは息を切らしながら言葉を続ける。

「もう私を追わないと……ユーリに誓って」

「それはできない。貴様を捕まえることが俺の、上から命じられた仕事だ。上からの命令はユーリ様からの命令と同義。自分の命のためにそれに背くことはできん」

レシィは悲しそうにアーバスを見つめる。

「貴様は人を殺したことがないのだな」

アーバスは半ば確信したように言う。

「そのような甘い考えで生きていけるほどこの世界は闇の使い手に優しくない。いつかはその手を血に染めることになっていただろう。それが今日であっただけだ」

アーバスは何故かレシィに自分を殺すように仕向けているようだ。

「言っておくがこの魔法が消えれば、俺は躊躇いなく貴様を捕える

ぞ。もちろんそこの少年もだ」

呆然と成り行きを見ていた駆は突然話題に挙げられてビクッ、と肩を揺らした。しかし、アーバスが捕えられている安心から少し強気になって言う。

「せっかくレシィが助けてやるって言ってるんだ。約束くらいすればいいだろ！」

そう言った駆をアーバスがキッ、と睨みつける。駆は思わず後ずさりした。

「簡単に言うな！　ユーリ様の命令は絶対だ！　ユーリ様の意向に沿うことが神殿兵の存在意義なのだ！！」

まったく引こうとしないアーバスにレシィは困った顔になる。アーバスの動きを止めるために使っている闇は存在させるだけでも魔力を消費する。もう長くは持ちそうになかった。

レシィが焦っていると森の奥から数人の神殿兵がやってきた。

「異端者め！　今すぐ隊長を離せ！！」

神殿兵がレシィを取り囲む。だがアーバスを人質に取られているため、迂闊に近づくことができない。

「わたしをもう追わないとユーリに誓って。そうすればこの人を離す」

神殿兵は顔を見合わせどうするか迷っていたが、その中の一人が折れた。

「わかった。誓うから隊長を離してくれ」
レシィは無言を持って神殿兵を促す。
アーバスも口を出さず傍観している。
「ユーリ様に誓って、俺は君を捕まえようとしない」
「あなただけでは駄目」
「俺たちユーリ教徒は君を追わない」
そう神殿兵が言うと闇は水のようにアーバスの体の表面を流れ落ちると、地面へと消えていった。
体自由になったアーバスは部下の下へ歩いて行くと、誓いを立てた部下を叱責する。
「お前は神殿兵の役割を理解していないのか！　やすやすとユーリ様の命令に背くな！！」
アーバスはそれだけ言うとレシィに対顔する。
「下位の兵士が一人誓いを立てた程度でユーリ教が貴様を追うのはやめないだろう」
駆とレシィはすぐに身構える。
「今危害を加えるつもりはない。部下の責任は俺がとる」
「俺たちを見逃してくれるのか？」
「ああ、一度神殿に戻り報告をする。だが、上からの命令があれば再び貴様らを追いかけるだろう」
「さっきその人が誓っただろ！」

「あいつはユーリ様に誓った。そのユーリ様から誓いを破れと言われれば、俺たちはそれに従うまでだ」

理不尽な言い分に駆は反論しようとするが、それをレシィが止める。

「なにを言っても無駄。諦めるしかない」

「でも……」

駆はそれ以上続けることはできなかった。当事者であるレシィが言うのなら駆は納得するしかない。

「納得できたようだな」

アーバスは駆が納得したのを確認すると、部下の方へ振りかえる。

「他の奴らを連れ戻せ」

「はっ！」

神殿兵たちは二手に分かれると森の奥とアーカーディアの方へ向かっていった。

アーバスは神殿兵たちが木々の中へ消えていった後も一人その場に残っていた。

「娘。敵を殺すくらいの覚悟がなければ逃げ続けることはできないぞ」

アーバスはそう言うと馬乗って走り去った。

アーバスが去った後、少しの間呆けていた駆は助かったことを理解して脱力した。

「はぁー、助かった……。」

座り込んだ駆に心配そうにレシィが近づく。

「大丈夫、大丈夫。ちょっと気が抜けただけだから。それにしてもあの隊長さん、レシィに逃げてほしいみたいな言い方だったね」

レシィはこくりと頷いて同意する。

「捕まえようとしてる相手に逃げる助言するなんて変な人だなぁ」

「それを考えるのは後。早く森からでないと危険」

レシィの言う通りこのままでは危険なのですぐに立ち上がった。

「レオンは大丈夫かな？」

「わからない。夜になる前に助けにいかないと」

魔物のいる森は危険だ。一刻も早くレオンと合流する必要があった。

ただ、レシィもかなりの魔力を消費しており、今魔物が出てくれば対処できないだろう。

不安要素は多くあるが、駆とレシィは危険を承知でレオンを探しに行くことにした。二人を守るために囮になったレオンを見捨てることは二人にはできなかった。

二人がしばらく歩いて行くと、さっき森へ向かって行った神殿兵たちがこちらに向かってきた。
駆は反射的に隠れようとするが、一人の兵がレオンといるのを確認してその場に留まる。

「レオン！！」

神殿兵がレシィに気付いて嫌そうな顔をする。

「カケル！！　無事だったんだね」

レオンも駆に気付いて安心した顔になる。
近づいていくとレオンの足から血が流れているのが駆の目に入る。

「レオン、足から血が……」
「大丈夫って言いたいところだけど一緒に行くことはできそうにないよ」
「神殿兵にやられたのか？」

駆は神殿兵を睨みながら言う。

「違うんだ。これはエミュールにやられたんだ」
「エミュール？」
「肉食の大型の鳥類だよ。神殿兵の人は俺のことを助けてくれたんだ」

事実を知り、駆はばつが悪そうに神殿兵から顔をそらした。

「レシィ。俺は君をエスファハンまで連れていくことはできそうにないよ」
「かまわない。わたしのせいであなたが怪我をした。ごめんなさい」
「怪我のことは気にしないで。俺が好きでやったことだから」
「ありがとう」

レシィの感謝の言葉にレオンは笑みで返す。
レシィは駆の方を向いた。

「あなたも帰った方がいい」

駆は目を閉じて考え込んだ。

駆は危険に敏感である。レシィと一緒に行動するのは危険であることは、駆は十分に理解できていた。神殿兵のこともあるが、レシィといると一般人ですら敵になりうるのだ。駆には困難に打ち勝つ力もなければ、逃げのびることもこの世界では難しいだろう。
駆の中では今、三つの選択肢があった。
一つはレオンと一緒に宿に帰ること。
次にレシィをエスファハンまで送り届けること。
最後に……

駆は目を開いた。

「レシィ、俺を連れて行ってくれ」
「連れていく？」

ニュアンスの違いにレシィは復唱する。

「前から考えてたんだけどさ、アーカーディアにいても俺は元の…

…地球に帰ることはできないって。だから、旅についていきたい！」

駆の三つ目の選択肢はレシィと旅を共にすることだった。

しかし、レシィは乗り気ではない。

「わたしといるのが危険なのはわかったはず。他の人に頼んだ方がいい」

レシィの正論に駆は口ごもる。

駆はアーバスとの会話でレシィがかなりアウェーな存在であることを知った。誰にも助けてもらえないと、悲しそうな顔をしたレシィの顔が駆には忘れられなかった。

”そばにいるだけでもレシィを勇気づけられるのではないか”

それが駆がレシィと旅を共にする理由だった。

つまり、駆は底抜けのお人好しなのだ。アーバスに腕を切られた時に感じた恐怖はもう忘れてしまっていた。ただそんな恥ずかしい事を面と向かって言えない駆はなにも言えずに固まってしまった。

レシィはそんな駆に追い打ちをかける。

「あなたは足手まとい」

ズーンという音が聞こえてきそうなほどに駆は落ち込んだ。

そうだよね、今日も迷惑かけてばかりだったし、などと図星なだけに凄まじい落ち込みようだった。

そんな駆を見てレシィは顔には出さないが焦り始めた。実のところレシィは駆の申し出が嬉しかったのだ。だからこそ駆を危険な目に遭わせるわけにはいかないと考えて言った言葉だった。

焦ったレシィは饒舌になって駆をフォローし始めた。

「迷惑じゃない。わたしはあなたが連れて行ってほしいと言われた時嬉しかった。それにあなたが危ないって注意を促してくれなかったらわたしは切られていた。足手まといっていうのは嘘。あなたには本当に感謝してる。だから、落ち込まないで」

無表情ではあるが焦っているのは明らかだった。

突然のことに呆気にとられていた駆だったが、隣から聞こえてきたレオンの忍び笑いによって我に返った。そして笑い始めた。

レシィは表情を変えないのでは恥ずかしがっているかどうかはわからないが、ただ、レシィの新雪のように白い肌が赤く染まっていた。

「レシィ。俺やっぱりついていきたい」

駆は笑うのを止め、再度レシィに告げた。

「本当に危ない。死んでしまうかもしれない」

レシィは強い口調で言う。

「それでも君と旅をしたい」

駆は決意を込めて言う。

レシィは駆の言葉を聞くと無表情を崩した。

「これからよろしく」

レシィは初めて満面の笑みを見せた。

別れ

駆とレオンは口を半開きにしてレシィが微笑む様子を眺めていた。無表情のときには表れなかった子供らしい無邪気さが笑顔から感じられた。

レシィは自分が笑っていることに気付くとすぐさま無表情に戻した。

「笑顔の方がいいと思うよ。な、カケル」

「うん」

レシィは二人の会話が聞こえないかのように口を開いた。

「一緒に来るなら早く行かないと」

レシィは周りの神殿兵を横目で見ながら言う。神殿兵は馬に乗っており、神殿に戻るまでそんなに時間はかからない。駆を急かしたのはそれを危惧してのことだった。

「そのままの格好で旅ができるの？　急いで出てきたから荷物は宿にあるだろ」

レオンは旅の危険を理解しているため、レシィと駆の二人が本当に今の装備のまま旅をこなせるのか疑問に感じたのだ。

「いつ襲われても大丈夫なようにいつもこれを持ち歩いている」

レシィは肩に掛けた荷物を見せながら言う。

「だけどそれだけじゃ厳しいだろ」
「大丈夫。火打石と水筒、ナイフがあれば大概の事は何とかなった。お金も入ってる」
「でもさ、一応リオンさんたちにも挨拶しに行った方が良いんじゃない？」

駆としては今までお世話になったリオンたちに一言感謝しておきたかった。

「駄目。村にはもう戻れない」
「でも少しくらいなら……」
「無理なの。もう戻れない」

レシィの様子は神殿兵を気にかけて村に戻らないと言っているわけではなさそうだ。

「どうしたの？」
「戻れるわけないだろ。俺たちが来た時にそいつが闇の使い手だということは知られている」

今まで黙っていた神殿兵が口を開いた。
アーバスがアーカーディアでレシィの秘密を口にしたのは、リオンたちとの会話中のみだ。しかし、多くの神殿兵が押し掛けるのを見た村人の一部は、好奇心のままに遠巻きに会話を聞いていた。神殿兵が言うように、アーカーディアでは今、レシィのことが大きな話題となっていた。
レシィの様子を見るに神殿兵の言うことは図星のようで、レシィの目からは怯えの色が見て取れる。村に戻れないのではなく、村に戻った時に村人から無下に扱われることを恐れて戻れないといった風だ。

今初めてレシィが闇の使い手であると知ったレオンは困惑するどころか、どこか納得した様子だった。

「ああ、そういうことか。だからレシィは神殿兵に追われてるんだ」

「レオンは驚かないのか？」

闇の使い手に偏見を持っていない駆でさえ驚いたことなのだ。この世界の住人であるレオンはレシィを恐れてもおかしくはない。むしろ恐がらない方がこの世界では少数派である。悪ければ罵声を浴びせたり、物を投げつけたりする者もいる。

「まあね。こんなに大人数の神殿兵に追われるなんて普通はあり得ないし、何かあるんじゃないかなとは思ってたんだ」

「それでもその反応は……」

駆はどんな表情をすればいいのか判らず、苦笑いを浮かべた。

「もちろん驚いたけど、追われている理由が闇の使い手で良かったよ。レシィが何も悪い事してないって判ったからね」

レオンの言葉に神殿兵の表情が変化した。神殿兵はレオンの言葉には闇の使い手が悪くないという意味が含まれていることを汲みとった。多くはレオンに対し怒りの表情を向けたが、中には目を伏せて者もいる。レオンの言葉に思うことがあったのだろう。

レシィもレオンの言葉に思うところがあったのか、思いつめた顔をしていた。

「どうして怖がらないの？　どうして殴ろうとしないの？　どうして……わたしに笑いかけてくれるの？」

過去を思い出しながら辛そうに話すレシィのその言葉はレオンだけではなく、駆にも向けられていた。

「一緒にいたらわかるよ。レシィが悪い子じゃないってことくらい」

レオンは爽やかな笑みを浮かべて、まるで小説に出てくる主人公のような台詞を言った。

「俺は闇の使い手のこと知らなかったからさ」

対して駆はレオンのようにカッコいい理由があるわけではなかった。

しかし、闇の使い手という立場に全く先入観を持たずに接してくれる駆の存在は、レシィに大きな安心を与えた。

結局、駆とレシィはアーカーディアには戻らない事にした。

レオンはレシィとある程度の時間を過ごしたため、事実を知っても変わりなく接している。だが、それはアーカーディアの村人全員に共通しない。中にはレシィに恐れを抱くものもいるだろう。

「レシィ。すぐには無理かもしれないけど、必ず会いに来てくれよな。きっと父さんも母さんも歓迎するよ」

レシィはレオンを見ずに頷いた。

「カケルも絶対に来てくれよな」
「ああ、必ず行くよ」
「荷物はちゃんと保管しておくから」
「話が終ったなら行くぞ。森の中にずっといるのは危険だ」

今いる中で一番年を取った神殿兵は焦った様子でレオンを急かした。

「あっ、はい。すぐに行きます。じゃあね、二人とも」
「お前隊長に何をしたんだ！！」

レオンは駆とレシィを振り返りながら去ろうとした。しかし、一人の若い神殿兵によりその場のすべてのもの動きが止まった。

「あの隊長がお前みたいな子供に負けるもんか！！」

声を張り上げたその神殿兵はアーバスの強さに憧れて二番隊に入った一人である。

アーバスは顕在魔法を使えない。
この世界において顕在魔法を使える者はそれだけで強いと世間に見做される。それと言うのも、顕在魔法の使える一般人とそうでない兵士で戦えば、よほどその兵士の錬度が高くない限り顕在魔法を使える方が勝つ。そのため神殿兵に編入する際も顕在魔法を使えるかどうかで待遇が大きく変わる。一番隊から十番隊までである中で、

隊長が顕在魔法を使えないのはアーバスの預かる二番隊のみである。
神殿で一年に二度開催される武道大会で、アーバスは何度も顕在魔法を使える相手を下してきた。その中に当時二番隊の副隊長を務めていた者がいた。顕在魔法が使えず、不遇の扱いを受けてきた兵士たちはアーバスに憧れ、アーバスが所属していた二番隊への編入願いが相次いだ。あまりにもアーバスを支持する声が多かったため、神殿の上層部がアーバスの処遇を話し合った。結果、アーバスは負けたことで自信を無くし、神殿兵を辞めた副隊長の代わりを担うこととなった。副隊長となった後もアーバスは様々な功績を残し、退役することとなった隊長が推薦したことによってアーバスが隊長職に就くことになった。顕在魔法を使えない者が隊長となるのは、神殿兵の歴史の中で初めてのことであった。
そういうわけで、アーバスは未だに多くの兵士の、特に顕在魔法を使えない者たちの憧れであるのだ。彼らの中では、アーバスこそがこの世で最強の戦士なのであった。

「やめろ。それ以上そいつに関わるな」

周りの兵士が若い兵士を諌める。

「隊長に勝つような化け物だぞ」

若い兵士の言葉は他の兵士の言葉でもあった。ここにいる兵士は皆、アーバスに憧れて二番隊に入った者ばかりである。アーバスが負けたことを信じられないのは彼らも同じであった。寧ろ、より長い間アーバスと共に任務をこなしてきた分、若い兵士よりもその気持ちは強かった。
アーバスですら勝てない相手に自分たちが敵うわけがない。そういう考えから神殿兵たちはレシィに対して恐怖を感じていた。アーバスに対する憧れが強いほどその恐怖は大きい。レオンを急かした

のも一刻も早くレシィから離れたいという気持ちからだった。
駆は神殿兵の反応からアーバスの強さを悟った。そしてアーバスを倒したレシィもかなりの実力者であることも理解した。
駆はレシィを見た。駆の目に映ったのは悲しみの色を目に浮かべた儚げに立ち尽くすレシィの姿であった。そこからは強さは感じられない。逆に守りたくなる、そんな雰囲気のみが醸し出されていた。
レシィは感情を表情に出さないだけであり、感情がないわけではない。化け物と言われて傷つかないはずがなかった。
駆は歯を食いしばり、手が白くなるまで握りしめた。駆は神殿兵を睨みつけると、レシィの手を掴んだ。

「行こう」

駆は短くそう言うと、レシィの手を引き歩き去った。

レオンにはレシィにかける言葉が見つからなかった。
レオンは何も言えず、傷付いた様子のレシィを無言で見送った。

「俺たちも森から出るぞ」

アーカーディアに向かう道中では誰も言葉を発することはなく、重苦しい雰囲気が流れ続けた。
時の流れが遅くなったように感じつつも、やっとのことでアーカーディアに辿り着いたレオンを迎えたのはリオンと神殿兵であった。

「レオン！　怪我してるじゃないの！」
「そんなに酷い傷じゃないから大丈夫だよ、母さん。」
「でもこんなに血が出てるわよ」
「本当に大丈夫だから。それより父さんは？」

リオンは暗い顔になると言いづらそうに切り出した。

「レシィちゃんを庇ったから……」
「じゃあ、異端審問を？！」

異端審問とはユーリ教を信仰しない者に対する、地球で言うところの魔女裁判のようなものである。異端審問とは名ばかりでほとんど死刑宣告と変わりない。
レオンの想像は悪い方へと向かい、取り乱さずにはいられなかった。

「でも、少し様子が違ったわ。異端審問じゃないのかも」

リオンの言葉も今のレオンには慰めにならなかった。

「レオン、無事だったか」
「父さん」

無事な姿を見てやっと安心できたのか、レオンは気の抜けた声を出す。

「異端審問じゃなかったの？」
「レシィちゃんを庇ったことは不問になった」
「な、なんで？」

後ろからはアーバスの帰りを促す声が聞こえてくる。本当にこのまま帰るつもりのようだ。

「わからない。不問にするとしか言わないんだ」

闇の使い手を庇い、何のお咎めもないとはどういうことだろうか。何らかの罰則があってもおかしくはないはずなのに。

レオンは疑問を胸に去っていくアーバスの後ろ姿を見送った。

天翔ける剣

森と川に挟まれた道が続いている。あまり使われていないのか至るところに雑草が生い茂っている。稀に森から草食動物が出てきては、川の水を飲んでいた。

そんな道を駆はのんびり歩いていた。

駆はつい先程まで、剣を向けられたり、一触即発の雰囲気の中にいたことで今までにない緊張状態にあった。それが原因か、緊張から解放された今の駆には警戒心が消え去っていた。レシィはあまり話さないので自然と駆も無言になる。二人分の足音と川のせせらぎ、木々の風になびく音のみが耳に入ってくる。

そんな穏やかな雰囲気を壊すかのように、今までとは異なる音が二人の前方から発せられた。茂みをガサガサとかき分ける音は徐々に近づいて来る。レシィは臨戦体勢になりながら、駆はやはり警戒心なく、音の発生源を見つめた。　音は十メートルほど先で一度途切れた。少しの間があり、大きな音と伴に茂みから小鹿が飛び出してきた。

「鹿だ」

駆は都会ではまず見られない野生の鹿を見て、思わず声をあげる。

鹿は駆の声に驚いて、背を向けて逃げ出した。

ただの鹿かとレシィも警戒を解いたその時、森から凄まじい速度で出てきた何かが小鹿に噛みついた。中型犬ほどの大きさで、上顎の犬歯が牙状に長く発達している。丸みを帯びた顔で、茶色く細い身体。猫のような生物だ。ただ牙とライオンに似た鋭い目付きは明らかに普通の猫と異なる。

「なんだこいつ?！」

「サーベルキャット。肉食で人も食べる」

慌てる駆にレシィは冷静に返す。

「人も食べるって……」

駆が後退りながら呟いた。

「レシィ。逃げよう」

駆がそう言った時にはもう、レシィはサーベルキャットに向けて走り出していた。　小鹿に夢中になっていたサーベルキャットは寸前になってレシィの接近に気付いた。噛みついていた小鹿の首を放すとレシィから離れる。逃げるつもりはないのか、一定の距離を保ちながら威嚇をしている。

「レシィ、危ないって！」

駆が声をかけると同時に、サーベルキャットがレシィに飛び掛かった。

レシィはサーベルキャットの牙を目掛け、いつの間にか持っていた黒色の剣を振り抜いた。右の牙はいとも容易く折れ、サーベルキャットは地面に叩きつけられた。レシィはすぐさまサーベルキャットに近づくともう一方の牙に剣を振り下ろした。牙はいとも容易く折れ、ただの目つきの悪い猫のようにも見える。

「もう大丈夫」

レシィは牙を拾うと、駆にそう言った。

「レシィ！　まだ動いてるよ！」

駆はレシィの後ろで立ち上がるサーベルキャットを見て、慌てて叫んだ。

しかし駆の懸念は無駄だった。サーベルキャットは立ち上がるや否や、わき目も振らず一目散に逃げていった。

「サーベルキャットにとって牙は強さの象徴。牙が折れたら抵抗しない」

「そうなんだ」

駆は空返事を返すと、血にまみれた小鹿に近づいた。首に穴の空いた小鹿は苦しそうにのたうち回っている。時折助けを求めるようにか細く鳴き声をあげる。

「かわいそうに」

医学の知識はないが、駆にも小鹿がもう助からないと感じられた。駆が小鹿に何もしてやれないことを悔しく感じていると、隣にレシィがやって来た。レシィは剣を振り上げ、小鹿の首を切り落とした。

「えっ、レシィ？」

駆は呆然とレシィを見つめる。

レシィも駆が何を言いたいか分からず、駆の目を見つめながら首を傾げる。

「いや、鹿……」

駆も言葉が見つからず、首を傾げて黙り込んでしまった。

「鹿、嫌い？」

その言葉で駆はレシィの意図を了解した。

「この鹿食べるの？」

レシィは当たり前と言わんばかりに頷く。

「鹿は美味しい」

そう言うとレシィは小鹿を掴み、再び歩き始めた。道筋には血が滴り落ち、地面を赤く染めた。その様子はさながらホラー映画のようであった。

程なく休憩に丁度良い開けた場所に着いた。

「お昼はここで食べよ」

レシィは立ち止まり、それだけ言うと鹿の解体に取り掛かり始めた。

駆はしばらく解体作業を眺めていたが、ふと枯れ木を集めようと思い立った。

「燃やせそうな木を探してくるね」

「あまり遠くに行くと危ない」

「さっきので十分わかったよ」

駆は苦笑しながらそう言うと、レシィから遠ざからないようにし

つつ、落ちている枝を拾い集めた。

焚火をするには十分な量が集まった頃にはレシィも作業を終えていた。水にさらして血抜きを終え、ふと空を仰ぐと太陽は頂点を既に越えていた。

「はぁー、やっと食べれる」

思わず気持ちが口をついて出てしまった。駆は今まで食事を用意してくれた母に感謝をしたくなった。それと同時に無性に家に帰りたくなった。

物思いに耽っていた駆は肉の焼ける臭いによって、意識を呼び起こされた。肉の焼かれる音は空腹を思い出させた。駆は夢中になって肉の焼ける様子を見つめた。

肉はほどよく焼け、待ちに待った食事の時間。

腹からは肉を要求する音が鳴り続けている。

「いただきます！！」

子供のように大きな声でそう言うと、駆は肉のかぶり付く。

「……おいひふはい」

何度か咀嚼した駆は肉を口に含んだまま顔をしかめる。

調味料を使っていない上に、血抜きも簡易なものだったので臭みが残っている。日本で生きてきて舌の肥えた駆の口には合わなかった。

「鹿、全然美味しくないじゃん」

駆は無言で口を動かし続けるレシィに不平を鳴らす。
レシィは口に入っていた肉を飲み込むと弁解した。
「他の生き物に比べると美味しい」
「他の生き物って、例えば？」
「イノシシ」
レシィは考えることもせず、即答した。
「イノシシ？　前に食べたけどそんなにまずかったかな？」
この世界に来て最初に出会ったイノシシを思い出して言う。晩御飯となった巨大イノシシは美味しいわけではなかった。しかし、味は鮮明に思い出せない。レシィが不快を顔に出すほど不味いのなら、駆も印象に残るはずだ。
「味付けしてたからかな。そんなに不味くなかったな」
「味付けせずに食べてみると分かる」
レシィはどうしても自分の意見を認めさせたいようだった。あまりにも熱心に語るので駆が笑いながら、
「そんなに嫌い？」
と尋ねると、レシィは大きく頷いた。
何とか空腹を紛らせる程度に肉を食べきった駆は暇をも持て余していた。

レシィは体に似合わす大食のようで、食べる速度の遅さも相まってなかなか食べ終える気配はない。

「そういえばあの剣も魔法なの？」

レシィは頷いた。

「ちょっとでいいから見せてくんない？」

駆は顔の前で手を合わせ頼むが、レシィは気が進まないようだ。

「ダメ？」

「ダメじゃないけど、あれをすると疲れる」

駆の知識では体力と魔力は別だというイメージだが、ゲームとは違うのだろうか。

「魔法を使うと頭が痛くなったり、使いすぎると気絶したりして大変」

「結構使いずらいんだね」

魔法が何でもできる便利なものと考えていた駆としては、何だかモチベーションの下がる話だった。

「剣見る？」

気落ちした様子の駆に励ますかのようにレシィが申し出た。

「でも疲れるんでしょ」

「少しならかまわない」

遠慮しておくべきなのだろうが、好奇心には勝てなかった。
「じゃあちょっとだけ見せて貰おうかな」
レシィはこくりと頷くと、手の平を上に向けた。レシィの体を影が伝い、手の平に集まる。集まった影は隆起し、剣の形を成した。
「凄い！！　触ってみても良い？」
駆は了承を得ると、剣を手に取り眺めまわした。
「軽っ？！　何も持ってないみたいに軽いな」
剣はレイピアのように細い。装飾は無く、刀身から何まで黒く染まっていて簡素な外形。そして驚くべき点は全く質量を持っていないことである。
「コレって何からできてるの？」
「……影？」
「そういえばそうだったね。でもなんで疑問形？」
「わたしもそれが何なのかわからない。影が無くても作れるから、影じゃないかもしれない」
レシィは空中に小さな闇を作り出した。影から造られてはいないが、なるほど確かに手に持つ剣と同じ材質のようだ。
「魔法を使ってる本人でもわからないんだ。それでも使えるって不思議だな」
「黒いものを想像するとできる」

レシィは空中の闇を無作為に飛び回らせると、闇を消した。

「剣もそんな風に飛ばせられるの？」

「やったことがないから分からない」

剣は手に持つものという固定観念があるため、レシィには剣を飛ばすなんてことは思い付きもしなかった。試しに駆の手に置かれた剣が空を舞う様子をイメージしてみた。

「想像できない」

この世界において魔法は行使する者の想像力に大きく依存する。威力、精度、速度、その他全てが想像力の高さに比例する。

この世界の住人にとって、剣が飛び回るなどという突拍子のないことを想像することは難しいようだ。

「じゃあこれでどう？」

駆は立ち上がると、剣をもって走り回った。剣が空を舞う様子を表現したいようだ。

昔人形を使ってこんなことしたな、と考えると急に自分が子供っぽく感じた。駆は顔を真っ赤にしてレシィの隣に座った。

「……どう？」

「やっぱり難しい。でも……」

レシィはそう言葉を区切ると、なにやら集中し始めた。しかし何も起こらない。

「これならできるかも……」

独り言のようにそう呟くと、レシィは剣を手に取り空に放り投げた。

「うわっ！！」

駆は自分目掛けて回転しながら落ちてくる凶器を見て、慌てて飛び退いた。

「浮いてる……」

剣は駆の目の前で、まるで風車かのように回っていた。

「すごい……すごいよ、レシィ！　やっぱり魔法はすごいや！！」

駆の賛美に気分を良くしたのか、レシィはさらにイメージを鮮明にしていく。剣は回転を止め、空中に静止した。ぎこちなく動き始め、無作為に飛び回り、最後にはレシィの手にすっぽりと納まった。

「レシィ。すごいじゃないか」

駆の称賛にレシィは僅かに微笑んだ。

「それにしてもすごいなー。他の魔法も見てみたいよ」

冒険というものに憧れを抱いていた駆にとって、これほど刺激的なことはなかった。これから続くであろう旅に思いを寄せて体を震わせる。

ふと、駆は先程のことを思い起こした。

「……レシィ。さっき避けようとしなかったら、刺さってたよね」

レシィは目を背けて、遠慮がちにこくりと頷いた。

駆はちょうど顔の辺りで回転していたことを思い出して、さっきとは違った意味で身を震わせた。

商人一家

二人がアーカーディアを出て5日は経っただろうか。最初こそ元気に歩いていた駆だが、日を経るごとに生気はなくなっていった。靴擦れや筋肉痛に苦しみ、固い土の上で寝るため疲れはとれない。旅の経験など全くなかった駆には、たった5日の旅も過酷すぎた。

「まだ着かないのかな……」

何度同じ質問をしただろうか。他の言葉を忘れたかのように、機械的に繰り返す。そしてレシィもそれに、もはや定型となった相槌を打つ。

「わからない」

その言葉を聞き、元々虚ろだった瞳を更に虚ろにさせる。肩を落として顔を俯ける。今の駆には顔を前に向ける力すら残っていなかった。

「まだ着かないのかな……」

前の質問から幾ばくも経たず再び同じ言葉が発せられた。その内に声すら出せなくなるだろうと感じるほどにか細い声であった。

「あともう少し」

駆は今までと同じ様に肩を落とし、ため息をついて、出し抜けに歩みを止める。今までの返答と異なることに気が付いた駆が力を振り絞り顔を上げると、木々の合間に門らしきものが見える。口角が

徐々に上がっていき、目にも活気が漲ってくる。

「やっと村だ！」

眼は輝きを取り戻していき、歩く速度も増していく。門を超えるころにはかけ足と言っても過言ではないほどの速さになっていた。

「着いたー！」

両腕を空に突き出し、達成感に満ちた声をあげる。少し前の青菜に塩な表情から打って変わり、新しい村への期待で顔を輝かせている。

アーカーディアと異なる町並みに、駆は目を右から左へと忙しなく動かす。疲れなどもう忘れてしまったようだ。

「アーカーディアよりも随分と大きな村だな」

「この先はローイェルとユーリへ続く分かれ道があるからだと思う」

「ローイェル？　それにユーリって女神の名前じゃなかったっけ？」

「そう。神殿を建てた都市を女神の名にちなんでユーリと名付けた。でも女神と都市名が混合して分かりにくいから、皆神殿と呼んでいる」

「へぇ、そういや神殿兵もこっちに向かってたな」

馬に乗り、颯爽と走り去っていく神殿兵の姿が思い起こされる。

「ローイェルは王都。ここから５つほど村を越えた所にある」

「意外と近いな」

「歩いて行くと一月はかかる」

「遠いな……」

駆はアーカーディアからの道程を思い出してげんなりとした表情になる。

「とりあえず今日泊まるところを探そう。ずっと野宿で疲れたよ」

「お前ら旅人か？　泊まるなら俺んちに来な」

背後から現れた男が、駆の独り言のような呟きに応じた。

見上げるほどに背の高い男は何故か上半身裸で、筋肉隆々の肉体を露にしている。赤茶色の髪を短く刈り上げており、鋭い目付きをしている。しかし、口元に光る小麦色の肌とは対照的に光る白い歯が威圧的に感じさせない。肩には二頭の鹿を担いでいて、それが豪快さを感じさせる。

男というよりは漢といった風貌の男は、これまた漢らしいの太い声で話し続けた。

「空き部屋もあるし、二人泊めるくらい訳ねぇぜ。付いてこいよ」

男はそれだけ言うと、駆たちの返事も聞かずにずんずんと歩いていく。

駆とレシィは顔を見合わせてその場に立ちつくしていたが、男の早く来いよという呼びかけにそろそろと付いていった。

「ここが俺んちだ。さあ、入ってくれ」

周りの家と比べると幾分か大きく、他の家では飼われていない馬

が何頭も繋がれている。

「帰ったぞ」

「おかえり。どうだった？」

男の帰宅の挨拶に奥に居た女が返事をした。

女は男と同じ赤茶色の長い髪を後ろでまとめている。筋肉質な、それでも女性らしさの失われていない身体が服の隙間から見え隠れする。

「今日は鹿が二頭に、人間二人だ」

駆は狩りの成果のように人間二人って言うなよ、というツッコミを飲み込んで招かれるままに扉をくぐる。

「あら、かわいいお客さんね」

魅惑的な微笑を浮かべながら駆たちに近づいてくる。

「門の前に居たから連れてきたんだ。こいつらは……そう言えば名前を聞いていなかったな」

「また一方的に話し続けていたんでしょ」

女は呆れたように首を振る。

全くの図星に男はばつが悪そうに顔を歪め、駆は苦笑いで返す。

「私はアリシア。彼はガランよ」

「俺はカケルです」

「わたしはレシィ」

「カケル君とレシィちゃんね。よろしく」

「宿泊するなら親父に話を通さないといけないな。親父ー！」
ガランが体の大きさに比例した大きな声を出す。
「そんなに大きな声を出さなくても聞こえるよ」
奥から中年の男性が出てきた。
チョビ髭を蓄えて、見事なメタボ体型。正に商人といった出で立ち。男性からは、溌剌としたガランやアリシアとは対照的に、大人しいという印象を与えられる。
最初は顔をしかめていた男性であったが、駆とレシィの姿を認めると直ぐに柔和な笑みを浮かべた。
「いらっしゃい。私はこの村唯一の商人で、コマスと申します。お二人は宿泊を希望ですか？」
風貌から感じる印象に違わず商人であったようで、丁寧な言葉使いで駆たちに尋ねる。
駆とレシィは何のわだかまりも懐かず肯定をしたが、ガランとアリシアは不満であるようだった。
「お父さん！こんな子供からお金取ろうって言うの？」
「そうだぜ、泊めるくらいタダでいいだろ」
「しかしな……」
コマスは二人の剣幕にたじろぎながら反論する。
駆も、お金を払うのはレシィだが、お金を払うのは問題ないと感じていたので、口論の仲裁に入ろうとしたが、奥から出てきた女性が一足先に口論に終止符を打った。

「どうしたの、みんな。お客さんが困っているじゃない」
「お母さん、聞いてよ！」
アリシアが事の概略を語る。
アリシアの母はアリシアがそのまま年を取ったような容姿で、ガランが２０半ばと考えると４０後半ばくらいだと駆は類推したが、３０代にも見えるほど若々しい。
話を聞き終えたアリシアの母は、駆とレシィに笑みを向ける。
「お金は必要ないわ。此処は宿ではないもの」
「クレア！これは商売で……」
「あなたは商人で宿屋じゃないでしょう」
尚も納得できないコマスは不平を鳴らそうとするが、クレアの穏やかな、しかし反論を許さない声色に口を閉じる。
「わかった、わかった。お金はいらない。ゆっくり休んでくれ」
周りの鋭い視線に耐え兼ねたコマスはため息を吐くと自棄になって声を上げる。
「なんか申し訳ないです」
「気にしなくていいんだぞ。元々俺は金を払わせる気はなかったんだ」
駆の言葉にガランは豪快に返す。
「お前らの年で旅すんのは大変だろ」
駆は旅の適齢期なんて知らないのでレシィを伺うが、無表情のま

ま身動ぎもしない。答える気はなさそうだ。

「確かに大変ですね。旅って何歳くらいからするのが普通なんですか？　俺そういうこと知らなくて」

「ふむ、そうだな……１６を超えていれば珍しくはないだろうな」

「それなら俺は珍しくないですね。もう１７なんで」

駆が言った言葉はガラン、そして周りに居た者に大きな驚きを与えた。

「お前、俺とひとつしか変わらないのか」

「私よりも年上じゃない！」

クレアはあらあらと言いながら微笑んでいるが、レシィは目を見開いて駆を見つめている。

皆一様に驚いていたが、この場で最も驚いていたのは駆である。

「アリシアさん年下なの！　ガランさんもひとつしか変わらないって……。と言うか皆俺のこと何歳だと思ってたの？」

ガランもアリシアも成人していると考えていた駆は、二人と年齢があまり変わらないことに瞠目した。

「俺は１４くらいかと思ってた」

「私もそのくらいかと思ってた」

日本では身長は高くないものの、童顔だとは言われたことはなかった。しかし、この世界では童顔の部類に入るようだ。

「レシィは俺のこと何歳くらいだと思ってたの？」

「わたしより年下だと思ってた」
みんながレシィの返答に苦笑した。
「おいおい、それじゃあカケルが１０才くらいってことになるじゃないか」
「流石にそれは言い過ぎよ」
ガランとアリシアの言葉にレシィはムッとしているようだった。
「レシィは何歳なの？」
駆の質問にレシィはムッとしながら小さな声で答えた。
「……１６」
思いもよらない返答に驚きの声が家中に響き渡った。

商人一家・末っ子

困り顔の駆と、いつもの無表情と区別のつきにくい仏頂面をしたレシィが押し問答を繰り広げていた。

「機嫌直してよ」
「別に機嫌は悪くない」
「怒ってるじゃん」
「怒ってない」

このような状況になったのはガランとアリシアが必要以上にレシィの年齢と外見のギャップをからかったのが原因だ。普段から無表情で、表情に変化の少ないレシィの機微を察するのは難しい。二人はレシィの変化に気づかずにからかい続け、レシィが拗ねていることに気づくと事態の収拾を全て駆に任せてどこかに行ってしまった。

最初は話し掛けても無言を貫いていたレシィだが、漸く返事はしてくれるようになった。ただ返ってくるのはつっけんどんな言葉ばかりである。

「ほら、二人も悪気があった訳じゃないし……」

心の中では悪気はあっただろうなあ、と考えながらも取り繕って答える。しかし、なおもレシィは納得できないようだった。

「あなたも笑ってた」
「うっ、それは……」
「あなたは何歳だと思ってたの？」

駆はとりあえず、これ以上機嫌を損ねないよう鯖を読むことにし

た。

「俺は15くらいだと思ってたよ」

レシィは信じていないようで、ジト目で駆を見つめる。

駆とレシィの間に何とも言えない沈黙が流れ、駆も気まずさを感じ始めた。目を逸らしてやり過ごそうとしていた駆は扉の陰から子供がこちらを覗いていることに気づいた。

「どうしたの？」

駆がそう尋ねると子供は慌てて扉に隠れた。

「アーノじゃねぇか。何してんだ？」

ガランの声が聞こえ、しばらくの間の後に小さな子供を抱えてきた。

くりくりとした大きな目が可愛らしく、まだ年齢は二桁に達していないと推測できる。金色の細い髪の毛、空のように青く透き通った目はコマスと全く同じであるが、駆は人が違えばこれほども印象が変わるのかと思わずにはいられなかった。コマスの金色の細い髪は禿げて薄くなったように見え、脂で光る丸々と太った顔には、その美しい青い瞳は不釣合いであるとしか感じられなかった。一方でクレアによく似た整った顔立ちを持つ女の子の髪と瞳は、その神々しさが女の子の可愛らしさを引き立てて天使のように見させた。

「ガランさん、その子は？」

「呼び捨てでいいっただろ。年はほとんど変わんねえんだから」

ガランの外見からは年が近いって思えないんだよな、と駆は苦笑

する。

「じゃあガラン、その子は何者？」
「こいつは俺の妹のアーノだ」
「へぇ、よろしくね」

駆は出来る限りの慈愛を表現した笑顔で挨拶したのだが、アーノはガランの後ろに隠れてしまう。

「アーノは照れ屋なんだ。ほら、ちゃんと挨拶しろ」

アーノは少し顔を覗かして、よろしくですと言うと再びガランの後ろに隠れてしまった。

「そういや、お前らはどこに行くつもりなんだ？」

ガランの質問に駆は困った。今思えば流れでレシィについてきたものの、目的地を聞いたことはなかった。そんな思慮に欠ける自分に思わず苦笑してしまう。

駆もレシィに疑問を向ける。

「とりあえず王都に向かってる」
「そうか。なら結構距離があるな」
「やっぱり王都は遠いのか……」

駆はガランの言葉で歩く辛さを思い出してげんなりとする。まだ一度しか体験していない旅だが、たった一度だけで駆にとってはトラウマと為り得るものだった。歩いても歩いても同じ風景が続くというのは、精神的にかなりきついものなのだ。

駆の様子を見ていたアーノはガランの服の裾をくいくいと引っ張

った。

「どうした？」

「明後日はタタラに行く日です」

駆は聞いたことのない単語に疑問符を浮かべる。

「タタラって？」

「タタラっていうのは親父が商売をしている村だ。ここから王都に向かって一つ村を越えたところにあるんだ。一月に一回、馬車で商品を運ぶんだが、もしかするとお前らを乗せてやれるかもしれん」

「ホント！」

駆にとってこれほど嬉しいことはなかった。思わずガランに詰め寄ってしまった。　ガランは駆のあまりの勢いに苦笑を浮かべる。

「親父に聞かないといけないがな。まあ、駄目とは言わせないさ」

「ありがとう。アーノちゃんもありがとね」

アーノはこくりと一度頷くと、何かに怯えた様にガランの後ろに隠れた。

「もう歩かなくて済みそうだね」

駆がそう言って振り返ると、そこには何かを一心に見つめるレシィの姿があった。

何を見ているんだろうか。疑問に感じた駆がレシィの視線を追うと、どうやらアーノを見つめているようだ。

アーノは顔を覗かしてレシィと目が合っては、怯えた様にガランの後ろに隠れるという動作を繰り返す。

「レシィ、どうしたの？」
「……かわいい」
レシィの聞き取れるか聞き取れないかの呟きを理解した駆は漸く気が付いた。今のレシィの目は欲しいオモチャを見つめる子供のそれによく似ているのだ。
「そんなに見つめたら、アーノも怖がっちゃうよ」
あまりにアーノに視線を集中させるので、見かねた駆はレシィを諌めようとした。しかし、レシィはどうにも諦められないようで顔は背けたものの、横目でちらちらとアーノを覗き見ていた。
「どうやらアーノのことが気に入ったようだな。じゃあアーノに二人をもてなしてもらうか」
ガランはそう言って笑いながら部屋を出ていった。
取り残されたアーノは駆とレシィを見比べると、レシィの視線から逃れるようにサッと駆の後ろに隠れた。

夕飯を食べ終わる頃になると、駆とアーノはすっかり打ち解けていた。

どうやらアーノはただの人見知りのようで、仲良くなってしまえば初めのように怖がられることもなかった。ただそれは仲良くなればの話であって、アーノのこととなると何かと暴走するレシィを完全に怖い人と認識したようで、アーノとレシィは未だに打ち解けていない。

「ボクのおかあさんは昔、ギルドで魔物退治の依頼を受けてたですよ」

「えっ、クレアさんって強かったの？」

クレアに優しくて優雅な女性という印象を抱いていた駆は意外なことに驚かされた。

「ハイです。とっても強いですよ」

「俺から見てもお袋は惚れ惚れする強さだぜ」

華奢なクレアだが、見た目にそぐわず、ガランに尊敬されるほどの強さを持っていることに驚かされる。

ガランは身長も高く、厚い胸板が服を破らんばかりに押し上げ、腕や足は駆の二倍ほどの太さである。素手でも熊を倒せそうな体つきである。

そんなガランに認められるクレアの強さとは如何ほどか。駆には想像もつかなかった。

訝しげな駆の表情に気付いたガランは付け加えて言う。

「お袋は顕在魔法も使えるんだ。身体強化だけなら負けることはないだろうな」

「あら、今から確めてみましょうか？」

「え、遠慮しておく」

ガランはよっぽど嫌だったのか、慌てて部屋を出ていってしまった。
駆はガランをあそこまで恐れさせるクレアに畏敬の念を抱く。
「クレアさんって凄いんですね」
「妻が優秀すぎるというのも困ったもんですよ」
駆の呟きを耳にしたコマスはため息混じりに吐露する。
「ガランには私の後を継いでもらうつもりだったというのに……。ガランもアリシアも妻のようになりたいと商人のことなんて歯牙にもかけずに修行だの、訓練だの言って商人になるための勉強をサボる。私の代で商人の家業も途絶えるかと思いましたよ。幸いアーノは才能がありそうなので今は安心してますが。あとは敬語さえちゃんと使えるようになったら完璧なんだけどね」
コマスは返事を求めていたわけではないようで、ひとつぎに愚痴を言うと、アーノに駆たちを部屋に案内するように指示して自室に入っていった。
アーノは素直にコマスに従って駆たちを部屋に案内する。
未だにレシィの熱い視線に怯えているようで駆の影に隠れ続けている。
レシィは羨望の入り交じった眼差しを駆に向けつつ、チラチラとアーノを横目で見ている。
居たたまれなくなった駆は、何とかして二人の仲を取り持つべきだと考えた。
「アーノ。そんなに恐がらなくてもレシィは恐くないよ」
レシィは首をコクコクと上下に振って無害をアピールする。

アーノは駆の表情を伺った。アーノはしばらくの間そうしていたが、やがて意を決したように口を引き締め、いかにも勇気を振り絞っていますといった様子でレシィの前に来るとひきつった笑みを浮かべた。

「……よろしくです」

「よろしく」

アーノは恐がりながらも、レシィはぎこちなくも笑顔を作って握手を交わす。

これで悪い雰囲気を払拭できただろうと安心した駆だが、なにやら様子がおかしいことに気付く。

元々ひきつっていたアーノの顔は更にひきつり、遂には恐怖に染まった。握手している手をブンブンと振り、それでも抜けないと分かると泣きそうな顔を駆に向ける。

駆は慌ててレシィを制止する。

「レシィ、アーノが恐がってるよ！」

レシィが名残惜しそうに手を放すと、アーノは一目散に駆に抱き付いた。

レシィが嫌われれば嫌われるほど、それと対照的にアーノは駆になついていく。短い間にガランたちに驚かれるほど駆はアーノと親密になった。

レシィは何とか心象を善くしようと、ことある毎にアーノに接触するのだが、その度にアーノの心は離れていった。二人が仲良くなるのは難しそうだった。

商人一家・末っ子（後書き）

閲覧ありがとうございます。
プロローグの後書きに今後の方針を書きました。よければ見てください。

九月十八日

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3518r/

脱兎のごとく

2011年10月8日20時09分発行